

ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代 IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料

高橋 裕子

Graves in Argolid, Greece, from the Late Helladic IIIC to the Protogeometric Periods

TAKAHASHI Yuko

The aim of this paper is to build a database for the study of the transitional period from the Late Bronze Age to the Early Iron Age of sites in Argolid, Greece. The study focusses on whether graves of the Late Helladic IIIC, Submycenaean and Protogeometric periods were excavated or not, to which periods we can date the graves and whether or not the sites were used in all three periods. We exclude Mycenae, Argos, Tiryns and Asine, which need to be dealt with individually in detail.

はじめに

ギリシアの青銅器時代終末期から初期鉄器時代にかけての移行期は、多くの研究者が関心を寄せる注目度の高い時期である。筆者は「ミケーネ時代の中心地がミケーネ文化崩壊後どのような状況にあったのか」という関心のもとに、この移行期のアルゴリスにおける埋葬資料を研究してきた。埋葬資料を選択した理由は、資料が豊富である上に、形態的にも数量的にも通時的な変化を把握しやすく、所期の目的において最も有益な資料であるからである。

本稿はその一環として、アルゴリスの後期青銅器時代と初期鉄器時代の遺跡を対象とし、ミケーネ文化崩壊直後の後期青銅器時代IIIC期から初期鉄器時代前期の原幾何学文様期にかけての資料状況を、とりわけ埋葬資料に注目して確認していきたい。ただし、ミケーネ、ティリンス、アルゴス、アシネの各遺跡に関しては、本稿の対象からは除外することとする。その理由は、これらの重要遺跡に関しては別稿が必要とされるからである¹。

本稿の課題と内容が一部重なる研究として、A.フォーリーの業績が言及さ

れよう²。ただし、フォーリーの著作は出版されてから既に30年以上が経過し、それ以降の報告をも含めて改めて検討する必要がある。

それでは以下、最初にアルゴリス平野内の遺跡、次に平野外の遺跡という順番で、資料状況を確認していきたい。

1. アルゴリス平野内の遺跡

フィフティア (ボリアリ)

ミケーネのアクロポリスから北西方向へ3 kmほど離れたフィフティアからは、後期青銅器時代IIIA2～IIIC期にかけて使用された小規模な横穴墓が1基発掘されている³。この墓においては亜ミケーネ期以降の使用は認められないことから、IIIC期の使用を最後に放棄されたと判断されよう。

また初期鉄器時代に関しては、上記の岩室墓のみならずこの一帯に関して今のところ報告がなく、現今の資料状況から推察すれば後期青銅器時代IIIC期以後人的活動は途絶えた可能性が高い⁴。

ゴルツリア

ミケーネのアクロポリスから2 kmほど北東方向へ離れたゴルツリアにおいては、プロフィティス・イリアス山の南斜面からミケーネ時代の4基の横穴墓が発見され、1964年にギリシア人考古学者G.ミロナスによって発掘された。当初発表された概報では4基すべてが後期青銅器時代IIIC期と記されていたが⁵、2001年に発表されたK.シェルトンの詳細な報告によれば、この墓域の主な使用年代はむしろ後期青銅器時代IIIA～B期にかけてであり、IIIC期の遺物が発見されたのは第III号墓の1基のみである⁶。

そのIII号墓におけるIIIC期の埋葬がこの墓域の最後の使用であり、亜ミケーネ期以降の資料は確認されていない。すなわち亜ミケーネ期以後は放棄されたと結論されよう。

ハニア (モナステイラキ)

ミケーネ南方のハニアからは、後期青銅器時代IIIC中期と報告されている火葬墓をとまなう大規模な塚が発掘されている。この遺構に関しては、別稿にて紹介した⁷。

ベルバティ

ミケーネの南東、アルゴリス平野の東側に位置するベルバティは、谷間にある比較的小規模なアクロポリスを中心に遺構群が広がるミケーネ時代の重要遺跡である。スウェーデンの研究者により幾度も発掘が行われてきた。また発掘以外の調査としては、石器時代以来の総合的な歴史像を明らかにしたという点において、B.ウエルズを中心に組織された1988～1990年にかけての周辺地域一帯における表面踏査が特筆されよう⁸。

ところで、ベルバティが紹介される際に強調される必須のことがらの一つに、この遺跡からは青銅器時代の土器工房が発見されていることがあげられる⁹。後期青銅器時代の土器を焼くための窯が出土しており、後期青銅器時代IIIA～IIIB期にかけてはキプロスなどに搬出された動物や戦車の図柄が特徴的な絵画様式の土器（Pictorial Style）の産地として知られていた¹⁰。土器生産がこの集落に富をもたらしたことは想像に難くなく¹¹、ミケーネ時代においてベルバティはミケーネの衛星集落として相応の繁栄を享受していた。

さらには埋葬資料からも後期青銅器時代におけるこの集落の発展は確認されており、とりわけ1935年に発掘されたトロス墓はこの集落が誇った勢力の大きさを裏付けるのに十分であろう。アクロポリスの北西に位置するこのトロス墓からは、盗掘されていたにもかかわらず、後期青銅器時代IIA～IIIA期の土器が出土し、中には華やかな文様が施されたいわゆる宮殿様式（Palace Style）の大型のものも含まれていた¹²。一方横穴墓群も発見および調査されており、その使用年代は副葬品から後期青銅器時代IIA～IIIB期と判断されている¹³。したがって本稿の関心であるIIIC期には既に放棄されていたと思われ、ミケーネ文化の崩壊による大きな影響が推察される。

後期青銅器時代IIIC期以降の資料の減少は横穴墓のみならず総体的にこの遺跡における顕著な特徴の一つであり、初期鉄器時代に入ると後期青銅器時代とは比較にならないほど資料が少ない。唯一言及すべきは、後期青銅器時代の横穴墓群のうち第3号墓から幾何学文様期の墓が出土していることであろう。豊富な副葬品を伴う墓であり、36個の土器のほかに幾つもの青銅製品が発見された¹⁴。この墓の資料から初期鉄器時代の後半期における人的活動の存在は明らかであるが、しかしその前半期に関しては目下のところ確認できない。

また周辺地域へと視野を広げても、後期青銅器時代IIIC期以降に関しては同様の資料数の減少が看取される。先に言及したウエルズを中心とした表面踏査の報告によればこの一帯においてIIIC期に何らかの人的活動が行われていたこ

とは明らかではあるが、しかし活発なものであったとは判断しえない。また埋葬資料に関して言及しておく、採集された土器の中にはその保存状態のよさから墓の副葬品であった可能性が推測されるものもあるが¹⁵、IIIC期の確実な墓は今のところ報告がない。さらにその後の初期鉄器時代に関しても、やはり地域全体で資料が少ない¹⁶。初期鉄器時代の可能性が言及されている石棺墓が1基発掘されてはいるが、副葬品が出土していないために正確な年代は不明である¹⁷。

これらのことから、ミケーネ時代に繁栄したベルバティ及びその周辺地域は、後期青銅器時代IIIC期以降急激にその勢力を減退させ、初期鉄器時代を通じて大規模な居住はなされなかったと結論されよう。そして現今の資料に鑑みれば、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期に関する確実な埋葬資料は、ベルバティからも表面踏査が行われた周辺地域からも出土していない。

ヴラセルカ

ヴラセルカは次に記す著名なヘライオンから1 kmほど北西に位置しており、近くにはヘライオンとミケーネを結ぶミケーネ時代の道が通過している¹⁸。ここでは横穴墓で構成されたミケーネ時代の墓域が発見されており、ギリシア人の研究者による断続的な発掘が行われてきた。具体的には19世紀のCh.ツングダスの調査を皮切りに¹⁹、20世紀に入ってからは1916年にA.S.アルヴァニトプロスが2基を確認している²⁰。さらに1977年にはE.デイラキにより2基が発掘され²¹、その後1981年にさらに3基が調査された²²。

ただし今まで調査された墓の中で、ある程度の情報が得られるのは1981年に発掘された3基のみである。副葬品や土製棺からそれらはすべて後期青銅器時代IIIA～B期のものと年代づけられており、したがって現段階ではこの墓域における後期青銅器時代IIIC期の使用は確認されていない。さらに初期鉄器時代に関する報告は見当たらないことから、現今の資料状況によれば後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料は存在しないと結論される。

プロシムナおよびヘライオン

前述のヴラセルカの南東に位置するプロシムナは、ミケーネから5 kmほど南東、そしてアルゴスからは7 km前後北東という二つの著名な遺跡にはさまれた場所に存在する。ここからはトロス墓と50基以上もの横穴墓から構成されるミケーネ時代の墓域が発見されている上に、幾つもの墓から初期鉄器時代や前

古典期の遺物が出土し墓所祭祀が行われたと推察されることから²³、ミケーネ時代そして初期鉄器時代双方の研究において重要な遺跡である。

既に19世紀に調査が行われていたプロシムナに関しては、20世紀に入ってから研究史上著名なC.ブレーゲンのそれをはじめ断続的に発掘が行われ、その成果が発表されてきた²⁴。さらにはこの遺跡の資料を総合的に検討した著作も上梓されており²⁵、あまたあるアルゴリスのミケーネ時代の墓域の中でも資料状況は良好な部類に入る。それらを検討するならば、この墓域の幾つかの墓は後期青銅器時代IIIC期の初期まで使用されていた可能性はあるが²⁶、墓域全体の趨勢を観察するのであるならば後期青銅器時代IIIB期でその役目を終えたと判断するほうが妥当であろう。IIIC期に関しては、その初期にわずかな痕跡を見出すことも可能であるが、総じて放棄されていたと見なす方が適切である²⁷。

一方ヘライオンは、プロシムナの南東に位置する丘に造営された遺跡である。青銅器時代を通じて使用されていたこの丘の斜面には、初期鉄器時代の後期または前古典期の初期に、後代にアルゴリス随一の宗教施設へと発展する最初のヘラ神殿（ヘライオン）が建立された。周知の通りヘライオンをめぐるは建設の時期やポリス成立期における神殿の役割など多様な議論が存在し多数の研究が発表されているが、本稿の分析に直接関係するものではないのでここでは省略したい²⁸。

上記の記述から明らかなように、プロシムナ及びヘライオン一帯はミケーネ時代に関しても初期鉄器時代に関しても重要な資料を提供するアルゴリスを代表する遺跡であるにもかかわらず、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料に限っては、プロシムナに関して言及したわずかなIIIC期の使用の可能性以外に資料は存在しない。墓のみならず他の資料に関しても同様であり、青銅器時代終末期から鉄器時代への移行期にかけては放棄されていたか、相当程度に過疎化した状況にあったと推測されよう。

スヒノホリ

アルゴスから11kmほど北西に位置するスヒノホリでは横穴墓から構成される後期青銅器時代の墓域が発見されている。そのうち5基がフランスの調査団により発掘されたが、その報告からは後期青銅器時代IIIC期の使用は確認されていない²⁹。

その後の初期鉄器時代に関しては、スヒノホリ一帯における幾何学文様期における人的活動は確認されているが³⁰、しかし亜ミケーネ期や原幾何学文様期

に関する報告は見当たらない。ということは、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期における埋葬資料は今のところ存在しないと結論されよう³¹。

ミデアおよびデンドラ

アルゴリス平野東部に位置するミデアはミケーネ時代に繁栄を誇った大遺跡であるにもかかわらず、1970年代までは調査が十分には進展せず、アルゴリスの他の重要遺跡と比較するとその全容の解明は著しく遅れていた³²。1983年にギリシアとスウェーデンの合同チームによる組織的な発掘が開始され、ようやくその詳細が詳らかにされるようになった。

ミデアのアクロポリスは海拔270m、周囲からの高さが170mある円錐状の岩山である。高く急峻である上に四方を見渡すことができる傑出したアクロポリスを有するこの遺跡は、既に新石器時代に使用された痕跡があり、初期青銅器時代の居住も確認されている。さらには中期青銅器時代の資料も相当数発見されていることから、新石器時代以来通時的に人的活動が行われてきた場所と表現されよう。それにはその優位な地勢が大きく影響していたことは想像に難しく、かかる要素を考慮に入れるのであるならば、ミケーネ時代におけるこの遺跡の繁栄は驚くにはあたらない。後期青銅器時代IIIB期において、ミデアはアルゴリスを代表する集落の一つであった³³。

1983年以降の調査ではミケーネ時代に関する夥しい資料が出土しているが、とりわけ著名なものとして、1995年に「西の門」一帯のある建造物から発見された土製の女性（または女神）像（フィギュリン）がある。高さが28.2cmというこの大型女性像は、手を胸に当て、頭の上には帽子または何らかの装飾物を付しており、宗教儀式に関連する遺物であろう³⁴。Archaeological Reportの表紙の写真に選ばれたことが、この遺物の秀逸さと注目の高さを端的に物語っている³⁵。

さらに特筆すべきことは、1983年以降の調査では線文字Bが刻された土製遺物や土器が相次いで発見されたことである。線文字B資料の出土によりミデアがミケーネ世界有数の高度な行政組織を有していたことが明らかとなり、ミケーネやティリンスと比肩しうるこの地方の中核的な存在であったことが確実となった³⁶。またその勢力の大きさや高度な組織力は、たとえばメガロンと呼ばれる建造物をはじめ種々の建築遺構からも確認されている。アクロポリスを囲むキクロベス様式の城壁は幅が5～7m、高さが最高では7mあり、ミデアの勢力の強大さを示している³⁷。

しかしかかる繁栄も後期青銅器時代IIIB期を最後に終焉を迎えることとなる。調査者の意見を紹介しておく、ミデアは後期青銅器時代IIIB期の遅い時期に壊滅的な打撃を被った。それは建造物の倒壊から確認されており、調査チームはその原因を地震と推測している。ただしそれによりこの集落が完全に放棄されたわけではなく、ミデアはIIIC期に入ってからもある程度の人口をかかえた集落として復興を果たした³⁸。

ミデアが集落としての機能を完全に失ったのは、亜ミケーネ期以降のことである。後期青銅器時代IIIC期のうちに何らかの要因によるさらなる打撃を被ったこの遺跡は、亜ミケーネ期以降はほとんど放棄されたままの状態が続くことになる。1967年に発表された報告論文においては、かつてドイツの調査隊が発見したというおそらく原幾何学文様期の土器片に関する記載があるが、図や写真は掲載されておらず、その時期の当否に関しては検証不可能である³⁹。さらに1998年と2007年に公開された報告書においても初期鉄器時代に関しては幾何学文様期の僅少の遺物に言及があるだけであり、特筆すべき新たな発見はない⁴⁰。2008年に行われた調査に関しては原幾何学文様期の土器片が出土したという情報があるが、しかし数は少量のようである⁴¹。

ミデアの資料をまとめると、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期にかけての埋葬資料は出土していないと判断されよう。

先に記したようにこの遺跡に関しては1980年代以降ミケーネ時代に関する質量ともに第一級の資料が立て続けに発表されてきた。そしてそれとは対照的に初期鉄器時代に対してはほとんど何も新しい知見がもたらされることがなかったことから、この時代の資料の少なさがむしろ際立って強調される結果を招いた。初期鉄器時代を通じて集落と見なしうるものが形成されていたか否か疑問に思われ、むしろ集落としての体をなすことなくアルゴスによる平野統一の波に飲み込まれた可能性が推察される。

後期青銅器時代IIIC期に居住していた人たちがなぜ再びこの集落に戻ってこなかったのか、地勢的に優位な状況にあるミデアのアクロポリスがなぜ復興しなかったのか、現段階の資料では容易には答えることはできない。この点に関して何らかの展望を見出すためには、同様に初期鉄器時代に著しく人口を縮小させ往時の勢力を回復しえなかったミケーネ、逆にミケーネ時代の有力集落でありながら初期鉄器時代にもある程度の繁栄を達成したティリンスなど諸遺跡との比較検討が肝要であろう。

一方、ミデアの北西に位置するデンドラからは、ミデアの集落に属すると推

察される中期青銅器時代から後期青銅器時代にかけての墓域が発見されている。トロス墓1基、横穴墓群そして3基の塚という規模の大きさのみならず、犠牲として塚に葬られた馬の遺骸⁴²や岩室墓（12号墓）から発掘された青銅製のよろい⁴³など耳目を集める資料が出土していることから著名な墓域である。塚3基に関しては、詳細な報告はないが、現在公表されているデータから判断すればその主要年代は中期青銅器時代からミケーネ時代でも比較的早い時期と推測され⁴⁴、本稿の分析対象からは除外されよう。

他方トロス墓は後期青銅器時代II期以降長期にわたって使用されたが⁴⁵、IIIB期を最後にその機能は一旦終焉を迎えたと思なされる⁴⁶。ただしその後初期鉄器時代の遺物が出土しており、さらに明らかに一度この時代の埋葬が行われた⁴⁷。その遺体に伴う土器をA.W.パーソンは原幾何学文様期と報告しているが⁴⁸、むしろ初期幾何学文様期と分類する方が適切であろう⁴⁹。これらの資料状況をまとめると、デンドラのトロス墓からは後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料は出土していないと結論される。

最後に横穴墓群であるが⁵⁰、その使用年代は後期青銅器時代II～IIIB期である⁵¹。2号墓から発見されたある遺体に関して亜ミケーネ期の埋葬の可能性が推察されているが、しかし信頼に足る証拠は提示されていない⁵²。

さらにデンドラに関しては、1961年に行われた表面踏査の結果から初期鉄器時代の墓域が存在する可能性が指摘されている。ただし、もしもそれが事実であったとしても、そこで採集された土器はいずれも幾何学文様期であり、原幾何学文様期に関する資料は含まれていない⁵³。

詰まるところデンドラに関する現在の資料を要約すれば、ミデア同様に後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料は出土していないと判断されよう。

ミデアおよびデンドラ周辺地域に関する他の資料としては、ミデアのアクロポリスから1～1.5kmほど南に下ったマジでミケーネ時代の横穴墓が発掘されているが、後期青銅器時代IIIC期の使用は確認されていない⁵⁴。またP.マウントジョイによれば、ミデア近郊ではさらに二箇所（Nisi, Rethi）において調査結果が未発表の横穴墓が発掘されているらしいが、やはりIIIC期の資料には言及がない⁵⁵。

一方初期鉄器時代に関する遺構としては、ミデアの東方、デンドラの北方に位置するマネシスから後期幾何学文様期と思われるピソス墓が⁵⁶、そしてもう1基、幾何学文様期と推察される二体の遺体が葬られた別のピソス墓がアマリアノスから発見されているが⁵⁷、原幾何学文様期の埋葬資料は報告がない。

以上の検討から、ミデアおよびデンドラー帯においては後期青銅器時代IIC～原幾何学文様期の埋葬に関する資料は、目下のところ出土していないと結論できよう。ただし後期青銅器時代IIC期に関してはミデアにおいて相当程度の人的活動が確認されていることから、いずれ当該期の墓が発見される可能性はあろう。今後の調査や報告を注視していきたい。

クルタキ

アルゴスから4 kmほど東方に位置するクルタキでは⁵⁸、幾何学文様期から前古典期にかけての聖所が発掘されており、この一帯が初期鉄器時代の後半期に使用されていたことは明らかである。しかしその前半期にあたる原幾何学文様期については資料が確認されていない⁵⁹。

クルタキに関しては上記の聖所以外には報告が見当たらず、現今の資料状況においては後期青銅器時代IIC～原幾何学文様期にかけての墓は出土していないと結論されよう。

コクラ

コクラはアルゴスから5 kmほど南西に位置し、トロス墓と横穴墓群から構成されるミケーネ時代の著名な墓域が発見された遺跡である。

1981年に発掘されたトロス墓は独特の建築的特徴、さらには金製および銀製の豪華な副葬品やフレスコ画が発見されたこと、それにもかかわらず墓室そのものからは遺骨が出土しなかったことなどから耳目を集めた遺構である。さらに重要なことは、トロス墓としては珍しいことに未盗掘であったため、出土遺物からこの墓の使用年代に関して信頼に足る情報が得られたことである。この墓の遺物は後期青銅器時代IIB～IIIA1期と報告されていることから、IIC期における使用の可能性は排除されよう⁶⁰。

一方トロス墓の周辺に広がる横穴墓群に関しては1982年に9基が発掘されており、その副葬品の土器の年代は後期青銅器時代I～IIB1期と報告されている。すなわち現今の資料状況では、横穴墓群においてもIIC期に関する資料は確認されていない⁶¹。

さらにこの墓域から800mほど東に離れた場所で、1992年にもう1基別の横穴墓が発掘された。出土した副葬品からその年代は「後期青銅器時代IIA2および後期青銅器時代IIC期」と報告されているが、しかし一般的な編年体系においては「後期青銅器時代IIC期」という区分は使用しない。「IIB」もしくは

「IIIC」のどちらかの誤記または誤植の可能性が高いが、遺物の写真や図面が公表されていないために判断は不可能である⁶²。もしもIIIC期であるならば本稿の課題に該当する遺構となるが、確実なところは不明である。

ケファラリ

アルゴスの南西方向に位置するケファラリ一帯は、石器時代の遺跡として重要な洞窟⁶³や「ピラミッド」とも通称される内側に傾斜する側壁を有する建築遺構⁶⁴など、著名な遺跡が点在する地域である。

やや南方のマグラをも含めてこの地域に関しては、緊急発掘の成果から後期青銅器時代や初期鉄器時代における人的活動が確認されており⁶⁵、本稿の関心から言って重要なことに、幾何学文様期の可能性が推測される墓も出土している⁶⁶。にもかかわらず、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期と年代付けられる埋葬資料は目下のところ発見されてはいない。

アギオス・アドリアノス (カツィングリ)

ティリンスから東方へ10kmほど離れた位置にあるアギオス・アドリアノス (カツィングリ) においては、プロフィティス・イリアスという丘陵から後期青銅器時代の集落址が発見されている。後期青銅器時代II期とIIIB期の居住が確認されているが、IIIC期に関しては今のところ報告がない⁶⁷。

ナウプリア (ナフプリオ)

ティリンスの南方に位置するナウプリアは、アクロポリスとして機能したアクロナフプリアおよびヴェネチアの要塞で著名なパラミディの二つの特徴的な丘を有する湾岸の集落である。この一帯からはミケーネ時代に関しても初期鉄器時代に関しても墓域が確認されているが、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期に関しては詳細な分析にあたいする埋葬資料は存在しない。

まず後期青銅器時代についてであるが、19世紀以来パラミディにおいて大規模な横穴墓群が断続的に発掘されてきた。ただしその注目度の高さや資料的価値の大きさに反して報告は断片的なものにとどまっており、全体像の把握には難が大きい⁶⁸。また1970年代にはその墓域の一角をなすと思われる別の横穴墓群が発見され、新たに33基が発掘された⁶⁹。この新しい調査に関しても詳細な報告は未発表であるが、少なくとも従来推測されていたよりもはるかに規模の大きい墓域であることが明らかとなった。現在公表されているデータに鑑みれ

ばこの一帯における墓の使用は後期青銅器時代IIIB期を最後に終焉を迎えたと思われ、後期青銅器時代IIIC期およびそれ以後の資料は確認されていないと結論されよう⁷⁰。

また亜ミケーネ期に関しては、1970年代に4基の石棺墓が発掘されている⁷¹。ただし調査年報におけるごく簡略な記載であり、個々の墓に関する詳細なデータが皆無である上に、遺物の写真や図面は掲載されていない⁷²。

最後に原幾何学文様期であるが、墓という解釈のもとに報告された堅穴が発掘されている。1955年にプロニアで発見されたこの遺構は直径が2 mある円形の穴であり⁷³、もしもこれが墓であるならば、アルゴリスの該期における一般的なタイプからは逸脱した特殊な形状と言えるであろう。しかし人骨に関しては一切の言及がなく、この遺構が埋葬に使用されたか否か確実な証拠は存在しない。A.スノッドグラスは墓と見なしているが⁷⁴、R.ヘイグは慎重な姿勢を見せており⁷⁵、筆者もこの遺構を墓と断定することには躊躇を覚える。これ以外には、ナウプリアにおいては原幾何学文様期に関する注目すべき資料が存在せず、該期における居住規模の小ささをうかがわせよう。

上記の結果ナウプリアからは後期青銅器時代IIIC期の墓は発見されておらず、亜ミケーネ期に関しては報告はあるが詳細は不明、また原幾何学文様期は疑問が大きい資料しか発見されていないと結論される。墓域の規模から推測されるミケーネ時代の勢力の大きさに比べて後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期における資料数の少なさも顕著であり、ミケーネ文化崩壊後の過疎の状況からある程度の復興を果たし得たのは幾何学文様期に入ってからと見なしえよう⁷⁶。

アリア

アリアはナウプリアから2.5kmほど北西に離れた場所に位置する村である。

1950年代にこの集落の南端でミケーネ時代の2基の横穴墓が⁷⁷、さらに1973年に別のもう1基が発掘された⁷⁸。双方の調査結果とも詳細は不明であるが、現今の公表資料に基づけば後期青銅器時代IIIC期およびそれ以降の使用は認められない。

一方アリアの北方に位置する丘からは⁷⁹、石器時代、初期青銅器時代、中期青銅器時代、後期青銅器時代そして幾何学文様期の土器片が出土しており、長期にわたって使用されていたことが明らかとなっている。本稿の関心から言ってみれば重要なことは、後期青銅器時代IIIC期の居住が確認されていることであろう⁸⁰。しかし埋葬資料に的を絞るのであるならば、調査年報に報告があ

る遺構は初期青銅器時代から中期青銅器時代への移行期と報告されている2基の墓のみであり⁸¹、他の時代のものは確認されていない⁸²。

以上の結果をまとめると、アリアではミケーネ時代および初期鉄器時代における何らかの人的活動の痕跡は認められるが、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料は未だ認められてはいないと結論されよう。

レルナ

現代の集落ミリの南東端に位置する海岸沿いの遺跡レルナにおいては、J.L.カスキーの指揮のもと1950年代にアメリカの調査隊による発掘が行われ、石器時代以来の夥しい遺構や遺物が出土した。とりわけ「屋根瓦の家 (The House of Tiles)」をはじめとする初期青銅器時代の資料は該期の研究において大きな価値を持ち、その時代に関してはギリシアを代表する遺跡と表現されよう。さらに続く中期青銅器時代においてもレルナは繁栄を誇っていた。

これらの時代に比すると印象は薄いですが、さらにはミケーネをはじめとする同時代の大集落に比肩しうる存在ではないが、レルナはミケーネ時代においても居住されていた。ただし後期青銅器時代IIIC期に関しては資料がなく、いわゆるミケーネ文化の崩壊にともない後期青銅器時代IIIB期を最後に放棄されたと推測される⁸³。

その後初期鉄器時代に入ると再び居住され、幾何学文様期の墓も出土している⁸⁴。しかし原幾何学文様期に関しては、多少の人的活動の痕跡は認められるものの埋葬資料の報告はない⁸⁵。

さらに、この遺跡周辺各地からも青銅器時代や初期鉄器時代の資料が出土している。まず青銅器時代に関しては、1955年に後期青銅器時代I～II期に使用されたと報告されている墓が⁸⁶、そして1966年にはアメリカの調査区域から400mほど北に離れた地点で中期青銅器時代後期から後期青銅器時代I期にかけての一群の墓が発掘された⁸⁷。一般にアルゴリスにおいてはミケーネ時代の盛期である後期青銅器時代IIIB期の資料数が顕著であり、集落の中心部のみならず周辺地域全体から該期の遺構や遺物が発見される例が多いが、目下のところレルナ周辺域においてはそれが看取されず、むしろ後期青銅器時代でも前半期に報告が集中している⁸⁸。

一方初期鉄器時代に関しては、レルナを調査中のアメリカ人研究者が1955年にそこから200mほど離れた山の斜面から15基の幾何学文様期の墓を発掘した⁸⁹。またレルナの遺跡から150mほど南西の地点では1970年代のギリシアの

緊急調査により、副葬品を伴わない2体の遺体が埋葬されたピソス墓、そしてそのかたわらから初期幾何学文様期の土器が副葬された子供の遺体が発掘された⁹⁰。ということはレルナ同様に、その周辺地域の調査においても年代を確認しうる初期鉄器時代の遺構はすべて幾何学文様期の墓であり⁹¹、原幾何学文様期については報告がない。

上記すべてのデータをまとめると、目下のところ、レルナ一帯においては後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期に関しては一切の埋葬資料は出土していない。そのみならず、後期青銅器時代IIIC～垂ミケーネ期に限っては人的活動の痕跡が見当たらず、ミケーネ文化崩壊後一時期放棄されていた可能性が高い。その後原幾何学文様期に入ってから居住が再開されたが、ただし集落規模はかなり限定されたものであったと想定されよう。本格的な復興は幾何学文様期を迎えてからと推測されるが、しかし初期鉄器時代を通してレルナは大集落へと発展することはなかった。

最後に近隣の遺跡として、ミリから2 kmほど南の地点において横穴墓群が発見されているが、その使用年代は不明である⁹²。

キヴェリ

レルナから海岸に沿って南に下って行くとアルカディアとの境界付近に⁹³、キヴェリという村が存在する。そこでは1966年にミケーネ時代の横穴墓7基が発掘された。調査年報によればその年代は後期青銅器時代IIIA～B期であり、後期青銅器時代IIIC期以降の使用は確認されていない⁹⁴。

2 アルゴリス平野外の諸遺跡

カザルマ

カザルマはナウプリアとエピダウロスを結ぶ道路のほぼ中間地点に位置し、ミケーネ時代の橋⁹⁵や城壁で囲まれた丘陵で知られる遺跡である。この城壁自体は古典期またはヘレニズム時代と推測されているが⁹⁶、丘陵全体の歴史ははるかに古く、初期、中期そして後期青銅器時代の土器も確認されている⁹⁷。おそらく、断続的ながら、周辺地域における人的活動の拠点として、長期にわたって使用されたと見なして差しつかえないであろう。

1960年代後半にこの丘のすそ部から1基のトロス墓が発見され、ギリシア人考古学者により発掘された⁹⁸。保存状態のいい後期青銅器時代IIA期の資料が出土し、さらには石を堆積して作られた祭壇とも呼ばれる遺構が発掘された。

そこからは、本稿の課題にとって重要なことに、犠牲として屠られた牛の骨などのほか、亜ミケーネ期の小型の土器（スキュフォス）が発見されている⁹⁹。年報の情報から推察する限りは、その土器は当該期の埋葬にともなう副葬品ではなく、いわゆる墓所祭祀の供物品と見なす方が妥当であろう。

2018年に新しい資料も発表されたが¹⁰⁰、カザルマのトロス墓においては、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料は確認できない。

リグリオ

エピダウロス近郊のリグリオにおいては、1970年代に2基の横穴墓が発掘された。ただしその出土土器の年代に関してはミケーネ時代と記載されているのみであり、詳細は不明である¹⁰¹。

エピダウロス

医神アスクレピオスの聖域で知られるエピダウロスにおいては、著名な劇場の裏手の山キュノルティオンの山頂からアポロン・マレアタスの聖域が発見され、19世紀以来断続的にギリシア人考古学者による調査が行われてきた。とりわけ1974年から開始されたV.ランヴリヌダキスの調査ではミケーネ時代および初期鉄器時代の宗教施設が出土し、研究史上重要な知見をもたらしたことで知られている¹⁰²。

この場所における人的活動の最初の痕跡は、初期青銅器時代にまでさかのぼる。長方形や馬蹄形の建造物および墓が発掘されており、この遺跡が長い歴史を持つことを明示している¹⁰³。中期青銅器時代に関しても遺物が出土しており、そしてミケーネ時代には犠牲獣を焼いた祭壇が屋外に設営されていた¹⁰⁴。その後の初期鉄器時代に関しては、祭壇をはじめとする幾何学文様期の遺構や遺物は出土しているが、しかし亜ミケーネ期および原幾何学文様期のものは確認されていない。

ミケーネ時代と初期鉄器時代の双方の研究において注目を集める存在ではあるが¹⁰⁵、この遺跡からは本稿の分析対象である後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料は出土していない。

ネア・エピダウロス周辺地域

ネア・エピダウロスは、アルゴリスの北東端に位置する村落である。この村から500mほど離れたパレオホリから後期青銅器時代の横穴墓が発見されてい

るが、使用年代も含めて詳細は不明である¹⁰⁶。

さらにネア・エピダウロスの西北方向に位置するディメナー帯においては、ヴァッサからキクロペス様式の城壁をとまなう住居址が発見されており、後期青銅器時代の土器も散布しているという。またアギオス・レオニダスという教会近辺で、ミケーネ時代および幾何学文様期の土器片が確認されている¹⁰⁷。ただし双方ともに、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期に関しては報告がない。

アルゴリス北東端のこの地域に関しては十分な調査が行われているとは言い難く、断定的な結論を出すには時機尚早であろう。ただし現今のデータに鑑みれば、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期に関する埋葬資料は存在しない。

パレア・エピダウロス

サロン湾沿岸のパレア・エピダウロスにおいては、カタラヒという丘陵から横穴墓で構成されたミケーネ時代の墓域が発見されている。1888年に7基の墓が発掘されたが長らく未報告のままであり、1970年代に入ってからその時点で確認しうる遺物についての報告論文が発表された¹⁰⁸。それによると出土遺物のうちの 하나가後期青銅器時代IIIC期の土器（鍔壺）であるため¹⁰⁹、少なくとも1基はその時期に使用されたと判断される。ただし墓域全体の図面が存在しないのみならず、そのIIIC期の土器がどの墓から出土したのか、副葬されていた墓の遺骸の状況はどのようなものかなど、詳細は不明である。

また1980～1990年代にかけて上記の7基と同じ墓域に属する新たな横穴墓が数度にわたって発掘されたが、概報に鑑みるならば、後期青銅器時代IIIC期およびそれ以降の資料は出土していない¹¹⁰。

これらの結果をまとめると、パレア・エピダウロスにはある程度の規模のミケーネ時代の墓域が存在し、少なくともそのうちの1基は後期青銅器時代IIIC期に使用された。ただし、おそらくこの墓域の主要年代は後期青銅器時代IIIB期までであり、ミケーネ文化崩壊後の後期青銅器時代IIIC期における使用は、IIIB期に比べれば大幅にその規模は縮小されたと推察される。そしてIIIC期を最後に、完全に放棄されたと見なしえよう¹¹¹。

この横穴墓群以外で本稿の課題にとって重要な資料としては、I.メタクサス通りから火葬墓2基が発見されている。1基（8β）は後期青銅器時代IIIC期で、骨壺の中からは青銅製のフィブラが発見された。もう1基（8α）は亜ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期におけるアッティカ製のアンフォラを骨壺として使用しており、口縁部には青銅製容器がかぶせられていた。また中

には、青銅製の指輪が副葬されていた¹¹²。これら2基の墓は、アルゴリスにおける青銅器時代から鉄器時代への移行期においては例外的な火葬であり、括目すべき事例である。亜ミケーネ期から原幾何学文様期への移行期の骨壺(8a)がアッティカ製であることをも含めて、当該期の社会を論究するに際して稀有な資料と言える。

さらにこの一帯からは、幾何学文様期の人的活動の痕跡も確認されている¹¹³。

シノロ

アシネの北東方向、次に言及するカンディアの北方に位置するシノロにおいては、初期青銅器時代および後期青銅器時代の使用が認められる集落址が発掘されているが、後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期に関する報告は存在しない¹¹⁴。

カンディア

アシネから8kmほど東北方向に位置するカンディアでは、村から200m北に離れた小規模な丘の上から青銅器時代の集落址が発見されている。初期青銅器時代から後期青銅器時代IIIC期まで使用され、ミケーネ時代にはキクロペス様式の城壁が建造された。ただし後期青銅器時代IIIC期を最後に放棄され、その後の亜ミケーネ期や原幾何学文様期に関しては遺物や遺構が確認されていない。それらの時期は居住されていなかったか、または居住されていたとしてもその人口は僅少であったであろう。幾何学文様期に入ると再び集落が営まれるようになり、当該期の建造物が出土しているほか、上記のキクロペス様式の城壁もおそらく使用されたと推測されている¹¹⁵。

また、後期青銅器時代IIIC期の居住が確認されているにもかかわらず、それにとまなう墓域は発見されていない¹¹⁶。

イリア

カンディアから南に下った場所に位置するイリアでは、海岸近くに二つの丘陵からなる青銅器時代の集落址が発見されている。この遺跡は土器研究において重要なデータをもたらしたことで知られており、マウントジョイが提唱する「後期青銅器時代IIIB2期からIIIC前期への移行期」という編年区分においてはイリアの土器が主要資料として扱われている¹¹⁷。後期青銅器時代IIIC期の住居址として注目を集める存在ではあるが、それに属する墓域は未だ発見され

ておらず、今後の調査に期待されよう¹¹⁸。

一方初期鉄器時代に関しては、イリアー帯からは幾何学文様期の遺物が報告されているが¹¹⁹、しかし亜ミケーネ期や原幾何学文様期の人的活動は目下のところ確認されていない。現今の資料状況に鑑みれば、これらの期間は居住されていなかったか、または極度に過疎化した状態にあったと推測される。

以上すべてをまとめると、イリアでは後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期の埋葬資料は未だ発見されていないと結論されよう¹²⁰。

最後に、この遺跡の南方にある岬の海岸沖で1962年に発見された沈没船について言及しておきたい。1990年代に調査されたところ後期青銅器時代IIIB2期の土器が確認されたため、ミケーネ時代終末期の船と推測されている。必ずしもその積み荷は豪華なものではなかったが、注目すべきことに遺物の中にはキプロス製およびクレタ製の土器が含まれていた¹²¹。

このような資料の増加によりミケーネ時代における交易ルートやシステムが解明されると同時に、ミケーネ文化崩壊後それらがどのように変化したのか研究が進展することを期待したい。

メタナ半島

トロイゼン北方に位置するメタナは、サロン湾へと突き出た逆三角形の半島である。半島西部のメガロホリ近郊に、パウサニ阿斯（第2巻第34章）にも言及がある古代の遺跡メタナがある¹²²。

この半島においてはイギリスの調査隊による表面踏査が行われ、1997年に報告書が公刊された。それによると後期青銅器時代に関しては8地点において土器片が採集されており、先に言及したメガロホリを含むそのうちの数箇所はある程度の規模の集落であったと推測される。それにもかかわらず、後期青銅器時代IIIC期の遺物はいずれの遺跡からも確認されていない¹²³。今後個々の遺跡において発掘が行われた場合にはIIIC期の遺物が出土する可能性は否定できないが、少なくともこの表面踏査のデータに鑑みるならば、ミケーネ文化の崩壊にともなう社会変動がこの地域に深刻な影響をもたらしたことが指摘されよう。

さらにこの調査によれば後期青銅器時代IIIC期に続いて亜ミケーネ期に関しても人的活動の痕跡がなく、これらの時期は半島全体が放棄されていたか極度に過疎化した状況にあったと推測される¹²⁴。一方原幾何学文様期に入るとメガロホリなど数地点から土器片が確認されていることから、この時期に再び居住されるようになったと見なしえよう。その後の幾何学文様期の土器片も各地か

ら報告があるが、ただし一般に期待されるほど遺跡数は増加していない¹²⁵。また埋葬資料に焦点を当てるならば、初期鉄器時代および前古典期の土器片が発見されている半島北西部のマグラ近郊に墓域が存在する可能性が指摘されているが、現段階では断定できないであろう¹²⁶。

以上をまとめると、イギリスの表面踏査の結果からは、本稿の課題にとって重要な事柄として、次の二点が確認される。第一に後期青銅器時代IIIC～亜ミケーネ期に関しては、埋葬資料が発見されていないのみならず半島全域における居住そのものが疑問視される。第二に原幾何学文様期に関しては、居住されていた場所もあるが埋葬資料は発見されなかった。

ところでこの半島には、研究者の注目を集めるミケーネ時代の著名な遺跡が存在する。半島東部のアギオス・コンスタンティノスがそれであり、ギリシアの調査隊により後期青銅器時代の建造物が発掘された。大きな関心を集めるその理由は出土した建物の一室が祭祀場であったことにあり、多数の土製像（フィギュリン）や犠牲獣骨が発見されたことをはじめとして、ミケーネ時代の宗教研究に重要な資料を提供した¹²⁷。

また埋葬資料に関しては、別の部屋の床下から幼児の遺骸2体と胎児の遺骸1体が納められた石棺墓が発見されている。年代はおそらく後期青銅器時代IIIA～IIIB期であろう¹²⁸。

さらにミケーネ文化崩壊後におけるこの建造物の使用状況を見てみると、わずかに後期青銅器時代IIIB期からIIIC期への移行期と推察される土器が出土しているという報告があるのみであり¹²⁹、後期青銅器時代IIIC期においてはおそらく廃墟と化していた可能性が高い。

上記すべてのデータをまとめると、この半島においてはミケーネ時代にはある程度の規模の集落が営まれていたが、後期青銅器時代IIIC期に関しては資料が少ない。続く亜ミケーネ期に関しては人的活動の痕跡は未だ発見されておらず、現今の資料状況においては原幾何学文様期に入ってから再び資料が確認されるようになる。また墓に焦点を当てるのであるならば、原幾何学文様期に関しても今のところ報告がない。

トロイゼン

トロイゼンに関しては、多量ではないが、初期鉄器時代の資料が散発的に報告されている。既に19世紀に後期幾何学文様期の墓が発掘されており¹³⁰、さらに1963年および1980年にも幾何学文様期の墓が発見された¹³¹。またアスクレピ

オスの聖所（アスクレピエイオン）からも幾何学文様期の土器が出土していることから¹³²、初期鉄器時代の後半期においてはこの地に集落が営まれていたことは明らかであろう。

しかし後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期に関しては、資料が確認されていない。

ガラタス

ポロス島を対岸にのぞむガラタスの周辺地域においては、アパシアとマグラの二箇所から青銅器時代の重要な遺跡が発見されている。

まず、ガラタスから西に4 km、トロイゼンから東に4 kmほどの距離にあるアパシアにおいては、アデレス山の斜面から後期青銅器時代の墓域が発見された。今のところ二つの地点において墓域の存在が確認されており、双方ともに横穴墓により構成されている¹³³。1985年から1993年にかけてギリシア人考古学者が合計7基を発掘し、1991年に発掘された岩室墓（2号墓）の獣骨に関するデータ¹³⁴と3基の墓（A1、A5¹³⁵、B1号墓）の平面図およびそれらの若干の土器が報告されている¹³⁶。

発掘された7基の内獣骨に関する論文が発表された横穴墓からは、夥しい数の人骨も出土している。また出土土器の年代は後期青銅器時代IIB～IIIC期初期と記載されており¹³⁷、長期にわたって使用されたことが認められよう。後期青銅器時代IIIC期の遺物が出土していることから本稿の課題にとって有益な資料であるが、目下のところ詳しい報告が存在しない。

次にガラタスの西方、またアパシアからは1.5～2 kmほど北東方向に位置するマグラにおいては、メガリ・マグラという丘陵から青銅器時代の大規模な遺跡が発見された。丘陵頂上からは中期青銅器時代の建築遺構などが発掘されたが、特筆すべきはトロス墓の存在であろう。丘の北西斜面から3基ものトロス墓が発見され、1995年から3年間にわたって発掘された。とりわけ1号墓からは、既に古代において盗掘されていたにもかかわらず、土器や牛をかたどった土製像、金製品など豊富な副葬品が出土していることが明らかにされており、ミケーネ時代におけるこの集落の繁栄ぶりが推察される。

これらのトロス墓は3基ともに盗掘やヘレニズム時代における再利用など何らかの破壊行為を受けているために、その使用年代の確定には慎重な姿勢が要求されるが、おそらくいずれも後期青銅器時代IIIC期には使用されていないと思われる¹³⁸。

一方初期鉄器時代に関してはガラタスの周辺地域に関しては報告が見あたらない。

上記すべてをまとめると、この一帯からは後期青銅器時代IIIC期～原幾何学文様期に関しては、現今のところ、資料は確認されないと結論されよう。

ピガディア

南アルゴリスの南岸に位置する現代の集落ピガディアにおいては、アメリカの調査隊による表面踏査により、海岸から500mほど離れた丘陵から初期、中期、後期青銅器時代、さらには原幾何学文様期および幾何学文様期の土器が採集されている¹³⁹。この丘は南アルゴリスにおける上記の表面踏査において唯一原幾何学文様期そして初期幾何学文様期の遺物が確認された遺跡であり¹⁴⁰、それはすなわち初期鉄器時代前半期においては南アルゴリス全体が極度に過疎化していた中で、後述するヘルミオネとともにこの場所がいち早く居住されたことを意味している。またアメリカの調査チームが、この遺跡を『イリアス』の「軍船表」に言及があるエイオナイであると推測していることは明記しておく必要があろう¹⁴¹。

原幾何学文様期の人的痕跡が認められるということは、いずれ当該期の墓が発見される可能性は否定できない。

エイレオイ (イリオカストロ)

アデレス山の南麓、後に取り上げるヘルミオネの北東方向に位置するイリオカストロは、パウサニアス（第2巻34.6）にも言及がある古代のエイレオイと特定されている地である¹⁴²。ここからは後期青銅器時代の墓が発見されているが、詳細は不明である¹⁴³。

コテナ

イリオカストロから2.5kmほど北にあるコテナ山の南斜面では、現代においては山羊を囲うために使用されている洞窟から、アメリカの調査隊が表面踏査により石器時代、初期青銅器時代そして後期青銅器時代の土器片を採集した。後期青銅器時代の土器はわずかに4片であるが、そのうちの2片は後期青銅器時代IIIC期である。ただし現段階ではそれ以上の資料は確認できない¹⁴⁴。

ヘルミオネ

南アルゴリスの南岸に位置するヘルミオネからは、初期鉄器時代の遺構として原幾何学文様期および幾何学文様期の墓が出土している¹⁴⁵。しかし発表されているのは緊急発掘の調査年報のみであり、個々の墓に関する詳細な情報が記載されていないばかりか時期ごとの墓の数さえ明らかにはされていない。南アルゴリスにおける希少な原幾何学文様期の埋葬資料であるが、しかし十分なデータは公表されていない。

またアメリカの調査隊による表面踏査の結果によると、ヘルミオネから西方に1 kmほど離れた丘から初期、中期そして後期青銅器時代の土器片が採集され、その中には後期青銅器時代IIIC期のものも含まれているという。ただし現段階ではそれ以上のデータは存在せず、その集落に属する墓に関しても現段階では報告がない¹⁴⁶。

フルニ

フルニの村の南端にある丘陵プロフィティス・イリアスにおいては、アメリカの表面踏査により多量の遺物が採集された。それによればこの遺跡は初期、中期、後期青銅器時代、また幾何学文様期、そして前古典期や古典期、ヘレニズム時代さらにはローマ時代という長期にわたって使用されていたことが確認されている。後期青銅器時代の遺物の中にはIIIC期の土器片も含まれているが、この遺跡に関してはそれ以上の情報が存在せず、IIIC期の墓に関しても報告がない¹⁴⁷。

さらにフルニ周辺においては、村から北西方向に700mほど離れた別の丘（マグラ）から初期青銅器時代や幾何学文様期の遺物が採集されている。しかし後期青銅器時代IIIC期～原幾何学文様期に関しては、人的痕跡が確認されていない¹⁴⁸。

フランクティ

ギリシア有数の石器時代の遺跡であるフランクティおよびその周辺地域に関しては、後期青銅器時代や幾何学文様期の土器が確認されている¹⁴⁹。しかし詳細は不明である上に、本稿の課題である後期青銅器時代IIIC期～原幾何学文様期に特定される遺物の報告は存在しない。

クラニディ近郊プロフィティス・イリアス

クラニディから1.7kmほど北東方向にある円錐形の丘陵においては、アメリカの調査隊が表面踏査により後期青銅器時代の土器片を採集した。その中にはIII C期のものも含まれているが、それ以上の資料は存在せず、埋葬資料に関する報告はない¹⁵⁰。

ハリエイス (ポルト・ヒェリ)

遺構の一部が海に沈むハリエイスの遺跡においてはアメリカの調査隊による地上での発掘および海中での調査が行われ、前古典期から古典期にかけて発達した整然と広がる街路設計をはじめとして豊富な成果がもたらされた¹⁵¹。ハリエイスは新石器時代から初期青銅器時代にかけても居住された古い歴史を持つ集落だが¹⁵²、現今の公表資料に基づく限りミケーネ時代に関しては居住の痕跡をうかがうことができない。

一方初期鉄器時代に関してはアクロポリスから原幾何学文様期および幾何学文様期の土器が確認されており¹⁵³、また幾何学文様期に関しては墓の存在が推測されている場所もある¹⁵⁴。ただし原幾何学文様期の墓については報告が見あたらない。

ハリエイスの資料についてまとめると、後期青銅器時代III C期および亜ミケーネ期に関しては、目下のところ資料が確認されえない。続く原幾何学文様期においては人的活動の痕跡が認められるが、しかし埋葬資料は発見されていない。

終わりに

本稿での検討により、幾つかのことが明らかとなろう。

最も注目される点は、本稿で検討対象とした遺跡に関して言えば、後期青銅器時代III C期、亜ミケーネ期、原幾何学文様期の三つの時代において通時的に資料が確認されたところは、ほとんど存在しないということである(表1)。本稿の関心である埋葬資料に焦点を絞るのであるならばパレア・エビダウロスがその可能性を示す例外的な存在であり、それ以外からはこの移行期を通して使用された埋葬地は存在しない(表2)。

そこから推察されることとして、大多数のアルゴリスの集落は青銅器時代終末期から鉄器時代初期のいずれかの時期において、少なからず居住の断絶を経験していることが指摘されよう。中でも注目されるのはミデアである。ミケー

ネ時代には繁栄を謳歌したこの大集落でさえ亜ミケーネ期の居住は確認されておらず、その後の初期鉄器時代における衰退は著しい。かかる事実はミケーネ文化の崩壊が、アルゴリスの諸集落に再び戻ることができない致命的な変化をもたらしたことを推察させよう。

以下、時期ごとに特徴を見てみたい。

後期青銅器時代IIIC期の遺跡はアルゴリス全域に点在している。総体的な資料傾向から判断すれば、アルゴリスはミケーネ文化崩壊直後のIIIC期においてもある程度の居住人口を抱えていたと判断されよう。ただし、ベルパティのようにIIIB期までの繁栄から一転してIIIC期には著しく過疎化した遺跡もあり、個々の集落規模は必ずしも大きくはなかったことを強調しておきたい。

IIIC期の遺跡は、ごく大まかに二つのグループに分類することが可能である。最初のグループは、ミデアに代表されるようにミケーネ時代には繁栄した集落である。これらの遺跡は、IIIB期に比べればその勢力は減退したが、IIIC期に入ってから放棄されることなく維持された居住地である。

二番目のグループは、ミケーネ文化の盛期であるIIIB期よりもむしろその崩壊後であるIIIC期の資料が豊富な集落である。このタイプの代表であるイリアは、より大規模な混乱から逃れるために人々が避難してきた避難居住地と解釈されてきた。

後期青銅器時代IIIC期においてはミケーネ時代の大集落が弱体化する一方で、むしろ活況を呈した集落もあり、複雑で混沌とした社会情勢であったと推察しえよう。

またパレア・エピダウロスにおいては、後期青銅器時代IIIC期に関して横穴墓と火葬墓の二つが確認されており、両者の関係も注目される。

続く亜ミケーネ期に入るとアルゴリスの様相は一変する。本稿では検討の対象から除外したミケーネ、アルゴス、ティリンス、アシネの四箇所からは埋葬資料を中心に人的活動の痕跡が観察されるが¹⁵⁵、それ以外の遺跡は無人工または極端な過疎的狀況下に置かれていたと推察される。すなわちアルゴリスのほとんどの集落が廢墟と化した可能性が高く、地域全体が低迷していた。後期青銅器時代IIIC期の集落がなぜそのまま維持されることなく消滅したのか、その理由は不明である。ミケーネ文化崩壊以来の不安定な社会情勢が最終的な局面に達したことが推察され、アルゴリスは最も沈滞した時期を経験したと言えるであろう。

次の原幾何学文様期に入ると遺跡数は増加の傾向を示しており、明らかに復

興の兆しがうかがえる。ただし初期鉄器時代の後半期に比べればまだその数は少なく、本格的に地域全体が発展へと向かうのはやはり幾何学文様期に入ってからであろう¹⁵⁶。原幾何学文様期は、ポリス社会成立に向けての最初の一步を踏み出した胎動期である。

上記のことから明らかなように、総じてアルゴリスの諸集落は後期青銅器時代IIIC～原幾何学文様期にかけて大規模な社会変動を経験した。

- 1 これらの遺跡に関する筆者の業績として、下記のものがある。拙稿「青銅器時代終末期におけるティリンス—建造物T、「ティリンスの宝物」、クレタ製粗製鏡壺に関する資料紹介」『西洋史研究』新輯第43号、2014年、138-151頁、「青銅器時代終末期におけるミケーネ」『西洋史研究』新輯第44号、2015年、75-90頁、「ギリシアにおける初期鉄器時代の遺跡（3）アシネ」『マテシス・ウニウエルサリス』第19巻第1号、2017年、107-137頁。
- 2 Foley 1988, esp.pp.260-262, Table 1.
- 3 AD 19, B'1, *Chronika 1964*, 1966, 118-121. Cf. Mountjoy 1999a, 64, Thomatos 2006, 149.
- 4 フィフティアの報告としてAD 21, B'1, *Chronika 1966*, 1968, 125. さらにフィフティアに関しては, Hope Simpson & Dickinson, 1979, 37, Foley, 1988, 193.
- 5 *Ergon 1964*, 1965, 68, *PAE 1964*, 1966, 68, AD 20, B'1, *Chronika 1965*, 1967, 160.
- 6 Shelton 2001, 27-43.
- 7 拙稿「アルゴリスの後期青銅器時代IIIC期における墓制と社会—火葬墓を伴う墳丘墓の資料紹介を中心に」『西洋史研究』新輯第48号、2019年、54-69頁。
- 8 Wells ed. 1996.
- 9 Cf. Lupack 2008, 156-160.
- 10 Cf. Åkerström 1987.
- 11 この集落の土器生産に関しては, Schallin 1997, 2002, Whitbread, Ponting & Wells 2007.
- 12 Wace 1936, Frizell 1984.
- 13 Säflund 1965, Holmberg 1983.
- 14 Säflund 1965, 35-37, 81-90. 被葬者は「若い女性」と報告されている (Säflund 1965, 81). Cf. Antonaccio 1995, 27.
この墓を作った人々はおそらくその場所が崩壊した古い岩室墓であることに気がついていたと推察され、祖先とのつながりを求めたいわゆる墓所祭祀との類似性が指摘される。さらには副葬品の豪華さをも考えあわせるならば、被葬者はその集落において社会的に特別な役割を担っていた人物であった可能性も推測できよう。
- 15 Wells ed. 1996, 141-142, Findspot 20.
- 16 Wells ed. 1996, 177, Hjohlmán, Penttinen & Wells 2005, 102-103.
- 17 AD 37, B'1, *Chronika 1982*, 1989, 94.
- 18 Cf. Hope Simpson & Dickinson 1979, 37, Bintliff 1977, 289-290.
- 19 Tsountas 1889, 123. Cf. Demakopoulou 1987, 69.
- 20 *PAE 1916*, 1922, 90-91.

- 21 未発表である。Cf. Alden 1981, 221, Demakopoulou 1987, 69.
- 22 *AD* 36, B'1, *Chronika 1981*, 1988, 97-99, Demakopoulou 1987.
- 23 Blegen 1937a, Antonaccio 1995, 53-65. さらに関連文献として、Blegen 1939.
- 24 Σταματάκης 1878, Blegen 1937b, Protonotariou-Deilaki 1965, *AD* 25, B'1, *Chronika 1970*, 1972, 156.
- 25 Shelton 1996.
- 26 Protonotariou-Deilaki 1965, 130, 135, Shelton 1996, 47-48.
- 27 シェルトンは、後期青銅器時代IIIC期の早い段階でこの墓域は放棄されたと見なしている (Shelton 1996, 315)。一方マウントジョイは、この墓域の使用年代は後期青銅器時代IIIB期までと記している (Mountjoy 1999a, 64)。
- 28 たとえばWright 1982, Strøm 1988, Antonaccio 1992, Strøm 1995, Hall 1995a. その他の文献に関しては、Mazarakis Ainian 1997, 156-158.
- 29 Renaudin 1923. Cf. Furumark 1941b, 52, 53, 57, 62.
- 30 Papachristodoulou 1970, 118.
- 31 この一帯に関する文献として、*BCH* 17, 1893, 199-200, Frickenhaus & Müller 1911, 24-25, *JHS* 32, 1912, 386, *BCH* 44, 1920, 386-387, *BCH* 45, 1921, 512-513.
- 32 1983年以前の調査に関する報告として、Walberg 1967. また調査史に関しては、Iakovidis 1983, 21.
- 33 ミデアの通時的な歴史に関しては、Walberg *et al.* 1998, 175-178およびWalberg *et al.* 2007, 195-199が参考になる。
- 34 Demakopoulou 1999, Demakopoulou & Divari-Valakou 2001, 183-184.
- 35 *AR 1997-1998*, 1998, cover illustration.
- 36 Walberg 1992b, Demakopoulou & Divari-Valakou 1992-1993, Demakopoulou, Divari-Valakou & Walberg 1994, 39-41, Demakopoulou & Divari-Valakou 1994-1995, Walberg 1996-1997, Demakopoulou, Divari-Valakou, Åström & Walberg 1997-1998, 83-84, Demakopoulou, Divari-Valakou, Schallin, Ekroth, Lindblom, Nilsson & Sjögren 2002, 53-54. さらに、Demakopoulou 2004, 408-409.
- 37 城壁に関しては、Demakopoulou & Divari-Valakou 1999.
- 38 青銅器時代終末期のミデアに関する調査関係者の意見は、Walberg *et al.* 1998, 177-178, Walberg 1999a, Demakopoulou & Divari-Valakou 1999, Demakopoulou 2003, Walberg *et al.* 2007, 198.
ミデアの崩壊期に関する他の研究者の意見としては、Mountjoy 1997, 110-111, 1999a, 65, French, Stockhammer & Damm-Meinhardt 2009, 221.
- 39 Walberg 1967, 174, n.14.
- 40 Walberg *et al.* 1998, 178, Walberg *et al.* 2007, 198.
- 41 *AR 2008-2009*, 2009, 23.
- 42 Protonotariou-Deilaki 1990b, 94-106.
- 43 Verdélis 1967, Åström 1967, Protonotariou-Deilaki 1970, Åström in collaboration with Verdélis, Gejvall & Hjelmqvist 1977, 7-65, Greenhalgh 1980.
- 44 Protonotariou-Deilaki 1990b, 94-97.
- 45 Persson 1931, part I.

- 46 後期青銅器時代IIIC期および亜ミケーネ期の使用に関して問題とされてきた土器資料に関しては、Persson 1931, 31, no.37, 67, fig.47, Ålin 1962, 41, Desborough 1964, 77, Styrenius 1967, 133, Hägg 1974, 59, Antonaccio 1995, 28.
- 47 Persson 1931, 11, 41-42, 66-67. Cf. Antonaccio 1995, 27-28.
- 48 Persson 1931, 41, fig.24, 42.
- 49 Hägg 1962, 98-99, Antonaccio 1995, 28.
- 50 Persson 1931, part II, 1942, Åström in collaboration with Verdelis, Gejvall & Hjelmqvist 1977, Åström 1983.
- 51 IIIB期までというのが一般的な見解であろう (Ålin 1962, 42, Alden 1981, 262, Mountjoy 1999a, 65)。IIIC期も使用されたという意見として、Sjöberg 2004, 111, 114-115.
- 52 Persson 1931, 74. Cf. Wells 1990b, 126, Antonaccio 1995, 28.
- 53 Hägg 1962, 89-102.
- 54 AD 49, B'1, *Chronika 1994*, 1999, 151-152, AD 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 101.
- 55 Mountjoy 1999a, 65.
- 56 AD 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 101.
- 57 AD 54, B'1, *Chronika 1999*, 2005, 147.
- 58 Foley 1988, 185, Hägg 1992a, 13. ただし、アルゴスからの距離を 8 km と記している文献もある (AD 22, B'1, *Chronika 1967*, 1968, 178, Mazarakis Ainian 1997, 321)。
- 59 AD 22, B'1, *Chronika 1967*, 1968, 178-179, AD 23, B'1, *Chronika 1968*, 1969, 131-132, AD 25, B'1, *Chronika 1970*, 1972, 155-156. さらに、Protonotariou-Deilaki, 1982 (1984), 40-41, Hägg 1992a, 13, Mazarakis Ainian 1997, 321.
この遺跡とパウサニアスがアルゴスに向かう途中で言及しているデメテル・ミュシアの聖所との関連を推測する意見もあるが (Foley 1988, 185, Hägg 1992a, 13)、本邦の馬場訳ではかかる仮説に関する記述は見受けられない (パウサニアス『ギリシア案内記』下、馬場恵二訳、岩波書店、1992、第2巻第18章(3)、88-89)。
- 60 AD 36, B'1, *Chronika 1981*, 1988, 94-97, Demakopoulou 1990, 1993.
- 61 AD 37, B'1, *Chronika 1982*, 1982, 83-85, Demakopoulou 1993, 1997.
- 62 また「後期青銅器時代IIA2」という時期区分も一般には使用しない。「後期青銅器時代IIIA2」の誤りである可能性が推察されよう。もしもそれが正しいのであるならば、「後期青銅器時代IIC」も「後期青銅器時代IIB」ではなく「後期青銅器時代IIIC」の誤記または誤植である蓋然性が高いように思われる。
- 63 Felsch 1971, 1973, Bintliff 1977, 324-325. 初期鉄器時代に関しては、幾何学文様期の土器片が出土していることを明記しておきたい (Felsch 1973, 20)。
- 64 Lord 1938, 496-510, 1939, 1941, 95-103, 112, Scranton 1938, 538, Fracchia, 1985.
- 65 AD 29, B'2, *Chronika 1973-1974*, 1979, 242-247.
- 66 AD 22, B'1, *Chronika 1967*, 1968, 182. ケファラリの報告における4号墓の土器の解説が、幾何学文様期の特徴を示しているように思われる。ただしこの墓の年代が幾何学文様期であるとは明記されておらず、また出土品の図面や写真も掲載されていないため、4号墓が幾何学文様期の遺構であるか否かについては現時点では筆者には確認がない。
- 67 Mommsen, Beier, Heimermann & Hein 1994.
- 68 *Athenaion* 7, 1878, 183-201, *Athenaion* 8, 1879, 414, 515-516, Lolling 1880, Furtwängler

- & Lösckcke 1886, 45-47, *PAE 1887*, 1888, 52-54, *AD* 8, *Chronika 1892*, 1892, 73, *PAE 1892*, 1894, 52-54, Stais 1895, 220, 259, 261, *PAE 1953*, 1956, 195-204. さらに、Graef 1909, 22.
- 69 *AD* 28, B'1, *Chronika 1973*, 1977, 90-93, Dragona-Latsoudi 1979.
- 70 ただし後期青銅器時代IIIC期の使用を推測する研究者も存在する (Desborough 1964, 80, Hägg 1974, 72)。一方マウントジョイは、この墓域の使用年代を後期青銅器時代IIA ~ IIIB期と記している (Mountjoy 1999a, 66)。
- 71 *AD* 28, B'1, *Chronika 1973*, 1977, 91.
- 72 ナウブリアにおける亜ミケーネ期の資料に関して言及がある文献として、Wide 1910, 34, Styrenius 1967, 129, 134, Hägg 1974, 72, Hope Simpson & Dickinson 1979, 48, Foley 1988, 191.
- 73 *Ergon 1955*, 1956, 75-76, *PAE 1955*, 1960, 234-235.
- 74 Snodgrass 1971, 204.
- 75 Hägg 1974, 72.
- 76 幾何学文様期の資料として、*PAE 1953*, 1956, 191-195, *PAE 1954*, 1957, 232-241, *Ergon 1955*, 1956, 75-76, *PAE 1955*, 1960, 234.
- 77 *BCH* 79, 1955, 244.
- 78 Bintliff 1977, 311.
- 79 場所に関しては、Douzougli 1998, 18, fig.2.
- 80 *AD* 35, B'1, *Chronika 1980*, 1988, 110.
- 81 *AD* 37, B'1, *Chronika 1982*, 1989, 87.
- 82 ただし、幾何学文様期の墓の存在をうかがわせる記述として、Douzougli 1998, 19.
- 83 Wiencke 1998, 208.
- 84 Caskey 1954a, 7, 1955a, 27, 1956, 152, 1957, 148, 162. Cf. Angel 1971, 66, Hägg 1974, 62-64.
- 85 原幾何学文様期の土器片として、Caskey 1953b, 27, fig.6:A. おそらく円錐状の脚部の破片と推測され、カスキーはそれを疑問の余地なく原幾何学文様期と記している。この写真で判断する限り、筆者も原幾何学文様期と推測することが可能であるように思う (Cf. Hägg 1974, 62, n.214)。さらに当該期に関しては、Gejvall 1969, foreword (by J.L.Caskey), iv.
- 86 Protonotariou 1961.
- 87 *AD* 22, B'1, *Chronika 1967*, 1968, 182, Dietz & Divari-Valakou 1990.
- 88 レルナ出土の著名な竪穴墓 (shaft grave) 二基の存在およびそれとの関連が想起されよう。
- 89 Caskey 1956, 171-172, DeVries 1974. Cf. Angel 1971, 66-67.
- 90 *AD* 29, B'2, *Chronika 1973-1974*, 1979, 247.
- 91 年代の記載がないが、初期鉄器時代の可能性がある墓の緊急調査の報告例として、*AD* 26, B'1, *Chronika 1971*, 1974, 83. また遺構は発見されていないが、幾何学文様期の土器片が出土した調査として、*AD* 35, B'1, *Chronika 1980*, 1988, 122-123.
- 92 Verdelis 1959, 12-13.
- 93 現代のノモスの境界である。
- 94 *AD* 22, B'1, *Chronika 1967*, 1968, 179.

- 95 Balcer 1974, 148-149.
- 96 Lord 1939, 83-84, *BCH* 79, 1955, 244-246.
- 97 Hope Simpson & Dickinson 1979, 51.
- 98 *AD* 22, B'1, *Chronika 1967*, 1968, 179-180, Protonotariou- Deilaki 1968, 1969, *AD* 24, B'1, *Chronika 1969*, 1970, 104-105. さらに, Protonotariou-Deilaki 1990a, 76, 79-80, 82.
- 99 Mountjoy 1999a, 67, n.121, 196, no.469.ただし, この土器の年代に関しては異論がある。この土器を原幾何学文様期と見なす意見として, Hope Simpson & Dickinson 1979, 51, no.A25. またフォーリーもカザルマには原幾何学文様期の資料があると記しているが, おそらくこの土器のことであろう (Foley 1988, 183, no.49)。一方後期青銅器時代III期と見なす意見として, Antonaccio 1995, 28.
- 100 Βασιλοπούλου, Κεραμιδας & Σπυροπούλου 2018.
- 101 *AD* 27, B'1, *Chronika 1972*, 1976, 215.
- 102 この遺跡に関する文献として, Papadimitriou 1949, Lambrinouidakis 1982 (1984), Peppa-Papaoiannou 1985, Lambrinouidakis 2002.さらに, Lambrinouidakis 1979.
- 103 初期青銅器時代に関しては, Theodorou-Mavrommatidi 2003.
- 104 ミケーネ時代に関しては, Lambrinouidakis 1981.
- 105 この遺跡に関する言及がある文献として, Rutkowski 1986, 202-203, Wright 1994, 65-68, Mazarakis Ainian 1997, 321-322, Rutter 2001, 144, n.203.
- 106 Hope Simpson & Dickinson 1979, 53, no.A29, Foley 1988, 192, no.83.
- 107 Karo 1911, 150, Jantzen 1938, 558-560, Ålin 1962, 52, Hope Simpson & Dickinson 1979, 53, no.A30, Foley 1988, 199, no.112. アギオス・レオニダス教会の近くで, 後期青銅器時代の墓が発見されたという情報を記載する文献もある (Hope Simpson & Dickinson 1979, 53, no.A30)。
- 108 *AD 1888*, 1888, 155-158, Aravantinos 1977.
- 109 Aravantinos 1977, 79-83, Mountjoy 1999a, 165, no.341. Cf.Thomatos 2006, 23, no.70, 156.
- 110 *AD* 36, B'1, *Chronika 1981*, 1988, 99-100, *AD* 37, B'1, *Chronika 1982*, 1989, 90-94, *AD* 49, B'1, *Chronika 1994*, 1999, 156-158, *AD* 53, B'1, *Chronika 1998*, 2004, 131.
- 111 なお, *AR 2009-2010*, 2010, 39にトロス墓2基に関する記載があるが, 横穴墓の間違いである (Cf.*AD* 55, B'1, *Chronika 2000*, 2009, 187)。
- 112 *AD* 55, B'1, *Chronika 2000*, 2009, 187-188, *AR 2009-2010*, 39.
- 113 幾何学文様期の土器片が確認されている。Cf.Frickenhaus & Müller 1911, 29, Hope Simpson & Dickinson 1979, 52-53, no.A28.
- 114 Gebauer 1939, 293-294, Walter 1940, 221, Jantzen, Döhl, Grossman, Megow & Schäfer 1968-1969, 373, *Tiryys* VI, 195-240.
- 115 Möbius & Wrede 1928, 365, Gebauer 1939, 288-293, Walter 1940, 220-221, *Tiryys* VI, 214-219, Kalogeropoulos 2003. また幾何学文様期に関しては, Hägg 1965, 132, n.90. さらに, Hope Simpson & Dickinson 1979, 49-50, A21, Mazarakis Ainian 1997, 107.
- 116 カンディアー帯の他の調査として, *AD* 21, B'1, *Chronika 1966*, 1968, 130, *AD* 50, B'1, *Chronika 1995*, 2000, 104-105.
- 117 Mountjoy 1999a, 36-38, 67, 75.
- 118 Gebauer 1939, 294, Walter 1940, 221, Jantzen, Döhl, Grossman, Megow & Schäfer

- 1968-1969, 373-374, *Tiryns* VI, 127-194, 221-240.
- 119 *Tiryns* VI, 128.
- 120 イリアー帯に関する他の文献として、*AD* 21, B'1, *Chronika* 1966, 1968, 130-131, Schilbach 1977.
- 121 この沈没船に関しては、Phelps, Lolos & Vichos eds. 1999, Agouridis 2003. Cf. Bass 2001.
- 122 メタナの遺跡に関しては、Frickenhaus & Müller 1911, 35. Cf. Hope Simpson & Dickinson 1979, 55, no. A34, Foley 1988, 188, no. 73.
- 123 Mee & Forbes eds. 1997, 52-53. ただし、後期青銅器時代IIIB ~ IIIC期と記載されている土器はある (Mee & Forbes eds. 1997, 128, MS13, 154, MS106)。
- 124 ただし、後期青銅器時代IIIC期および亜ミケーネ期の土器片が採集されなかったにも関わらず、ミケーネ時代から初期鉄器時代への連続性は否定できないという (Mee & Forbes eds. 1997, 54, 59)。
- 125 Mee & Forbes eds. 1997, 57-60.
- 126 Mee & Forbes eds. 1997, 57, 127, MS11.
- 127 Konsolaki 1995, Konsolaki-Yannopoulou 1999, 2001a, 213-217, 2002, 2003c, Dimou, Perdikatsis, Oikonomou & Konsolaki-Yannopoulou 2003, Hamilakis 2003, Wedde 2003, Hamilakis & Konsolaki 2004. Cf. Shelmerdine 2001, 366-367, Lupack 2008, 150-151.
- 128 Konsolaki-Yannopoulou 2003b.
- 129 Konsolaki-Yannopoulou 2002, 32. それ以前に発表された調査年報においては、後期青銅器時代IIIC期の初期と推察される土器が出土していると記載されている (*AD* 46, B'1, *Chronika* 1991, 1996, 74)。
- 130 *AD* 5, 1889, 164. ただし先史時代の墓と報告されており、出土土器はミケーネ様式のものとして記されている。この墓および土器に関してはさらに、Wide 1899, 86, Frickenhaus & Müller 1911, 32-33, Welter 1941, 39, Coldstream 2008, 141, n.3.
- 131 Konsolaki-Yannopoulou 2003d, 127, 130.
- 132 アスクレピオスの聖所における幾何学文様期の資料とそれに関する議論については、Mazarakis Ainian 1997, 246, 322.
- 133 Konsolaki-Yannopoulou 2003a, 160, 187, fig.1, no.4-5.
- 134 Hamilakis 1996.
- 135 A5号墓は、獣骨に関する論文が発表されている1991年の2号墓とおそらく同一である。
- 136 Konsolaki-Yannopoulou 2001a, 217-218.
- 137 Hamilakis 1996, 155.
- 138 Konsolaki-Yannopoulou 2001a, 218-219, 2003a.
- 139 Jameson, Runnels & van Andel 1994, 484-485, E9 (Sambariza Magoula).
- 140 Runnels, Pullen & Langdon eds. 1995, 58-60.
- 141 Jameson, Runnels & van Andel 1994, 58.
- 142 この遺跡に関しては、Hope Simpson & Dickinson 1979, 57-58, A42, Foley 1988, 178, No.24. さらに、cf. Jameson, Runnels & van Andel 1994, 519-521.
- 143 *PAE* 1909, 1910, 182-183.
- 144 Jameson, Runnels & van Andel 1994, 371, 521, G9, Runnels, Pullen & Langdon eds. 1995, 55.

- 145 AD 46, B'1, *Chronika 1991*, 1996, 104-105 (幾何学文様期), AD 49, B'1, *Chronika 1994*, 1999, 147-148 (原幾何学文様期および幾何学文様期).
- 146 Jameson, Runnels & van Andel 1994, 371, 487, E13, Runnels, Pullen & Langdon eds. 1995, 55.
- 147 Jameson, Runnels & van Andel 1994, 371, 509, F5, Runnels, Pullen & Langdon eds. 1995, 55.
- 148 Jameson, Runnels & van Andel 1994, 509, F6.
- 149 Jacobsen 1969, 377, 378, n.49, Hope Simpson & Dickinson 1979, 58, A43, Foley 1988, 179-180.
- 150 Jameson, Runnels & van Andel 1994, 371, 444-445, B21, Runnels, Pullen & Langdon eds. 1995, 55.
- 151 McAllister 2005, Ault 2005. 街路設計に関しては、Boyd & Jameson 1981.
- 152 Pullen 2000.
- 153 Jameson 1969, 318.
- 154 Jameson 1969, 338.
- 155 Takahashi 2009.
- 156 幾何学文様期の遺跡数に関しては、Foley 1988, 260-262.

略記一覧

Argos et l'Argolide

A.Pariete & G.Touchais eds., *Αργος και Αργολίδα : Τοπογραφία και Πολεοδομία, Πρακτικά Διεθνούς Συνεδρίου, Αθήνα-Αργος 28/4-1/5/1990*, Paris, 1998.

Argosalonikos

E.Κονσολάκη-Γιαννοπούλου ed., *Αργοσαρωνικός : Πρακτικά 1^{ου} Διεθνούς Συνεδρίου Ιστορίας και Αρχαιολογίας του Αργοσαρωνικού, Πόρος, 26-29 Ιουνίου 1998*, Αθήνα, 2003.

Celebrations

R.Hägg & G.C.Nordquist eds., *Celebrations of Death and Divinity in the Bronze Age Argolid : Proceedings of the Sixth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June, 1988*, Stockholm, 1990.

Meletemata

P.P.Betancourt, V.Karageorghis, R.Laffineur & W.-D.Niemeier eds., *Meletemata : Studies in Aegean Archaeology presented to Malcolm H. Wiener as He enters his 65th Year*, I-III, Aegaeum 20, Liège & Austin, 1999.

Polydipsion Argos

M.Piérart ed., *Polydipsion Argos : Argos de la Fin des Palais Mycéniens à la Constitution de l'État Classique*, BCH Suppl.22, 1992.

Polemos

R.Laffineur ed., *Polemos: Le Contexte Guerrier en Égée à l'Âge du Bronze—Actes de la 7^e Rencontre Égéenne Internationale Université de Liège, 14-17 Avril 1998*,

Aegaeum 19, Liège & Austin, 1999.

Potnia

R.Laffineur & R.Hägg eds., *Potnia: Deities and Religion in the Aegean Bronze Age — Proceedings of the 8th International Aegean Conference, Göteborg, Göteborg University, 12-15 April 2000*, Aegaeum 22, Liège & Austin, 2001.

PSC

R.Hägg ed., *Peloponnesian Sanctuaries and Cults : Proceedings of the Ninth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June 1994*, Stockholm, 2002.

SCABA

R.Hägg & N.Marinatos eds., *Sanctuaries and Cults in the Aegean Bronze Age : Proceedings of the First International Symposium at the Swedish Institute in Athens, 12-13 May, 1980*, Stockholm, 1981.

Thanatos

R.Laffineur ed., *Thanatos : Les Coutumes Funéraires en Égée à l'Âge du Bronze : Actes du Colloque de Liège (21-23 avril 1986)*, Aegaeum 1, Liège, 1987.

Tiryns VI

H.B.Siedentopf, W.Rudolph, H.Döhl, U.Willerding & W.Voigtländer, *Tiryns : Forschungen und Berichte VI*, Mainz am Rhein, 1973.

Φιλία Έπη

Π.Ζέπος, Ν.Πλατών, Γ.Σακελλαράκης, Ι.Τραυλός & Μ.Χατζηδάκης eds., *Φιλία Έπη εις Γεώργιον Ε. Μυλωνάν διά τα 60 Έτη του Ανασκαφικού του Έργου*, vol.A: 1986, Γ: 1989, Αθήνα.

Wace and Blegen

C.Zerner, P.Zerner & J.Winder eds., *Wace and Blegen : Pottery as Evidence for Trade in the Aegean Bronze Age 1939-1989*, Amsterdam, 1993.

文献一覧

Agouridis, C. (Αγουριδης, Χ.) 2003: Οι Ενάλιες Αρχαιολογικές Έρευνες του Ι.Ε.Ν.Α.Ε. στον Αργοσαρωνικό: Το Ναυάγιο της Ύστερης Εποχής του Χαλκού στο Ακρωτήριο των Ιρίων του Αργολικού, in *Argosaronikos A*, 149-158.

Åkerström, Å. 1986: A Mycenaean Pictorial Vase Fragment from Tiryns, in *Φιλία Έπη A*, 144-147.

——— 1987: *Berbat 2, The Pictorial Pottery*, Stockholm.

Alcock, S.E. & R.Osborne eds. 1994: *Placing the Gods: Sanctuaries and Sacred Space in Ancient Greece*, Oxford.

Alden, M.J. 1981: *Bronze Age Population Fluctuations in the Argolid from the Evidence of Mycenaean Tombs*, Göteborg.

Αλεξανδρή, Α. & Ι.Λεβέντη eds. 2001: *Καλλιτεσμεα: Μελετές προς Τιμήν της Ολαγας Τζάχου-Αλεξανδρή*, Αθήνα.

- Ålin, P. 1962: *Das Ende der Mykenischen Fundstätten auf dem Griechischen Festland*, SIMA 1, Lund.
- Andreadi, E. ed. 2003: *Archaeological Atlas of Mycenae*, The Archaeological Society at Athens Library 229, Athens.
- Angel, J.L. 1971: *Lerna: A Preclassical Site in the Argolid—Results of Excavations conducted by the American School of Classical Studies at Athens*, II: *The People*, Princeton (published also as *The People of Lerna: Analysis of a Prehistoric Aegean Population*, Princeton & Washington).
- Antonaccio, C.M. 1992: Terraces, Tombs, and the Early Argive Heraion, *Hesperia* 61, 85-105.
- 1995: *An Archaeology of Ancestors: Tomb Cult and Hero Cult in Early Greece*, Maryland.
- Aravantinos, V. (Αραβαντινός, Β.) 1977: Μυκηναϊκά εκ Παλαιάς Επιδαύρου, *AD* 29, Α', Μελέται 1974, 70-87.
- Åström, P. 1967: Das Panzergrab von Dendra, Bauweise und Keramik, *AM* 82, 54-67.
- 1983: *The Cuirass Tomb and Other Finds at Dendra*, part 2: *Excavations in the Cemeteries, the Lower Town and the Citadel*, SIMA 4, Göteborg.
- Åström, P. & K.Demakopoulou 1986: New Excavations in the Citadel of Midea 1983-84, *Op. Ath.* 16, 19-25.
- Åström, P., in collaboration with N.M.Verdelis, N.-G.Gejvall & H.Hjelmqvist 1977: *The Cuirass Tomb and Other Finds at Dendra*, part I: *The Chamber Tombs*, SIMA 4, Göteborg.
- Åström, P., K.Demakopoulou, N.Divari-Valakou & P.M.Fischer 1992: Excavations in Midea, 1989-1990, *Op.Ath.* 19, 11-22.
- Åström, P., K.Demakopoulou, N.Divari-Valakou, P.M.Fischer & G.Walberg 1990: Excavations in Midea 1987, *Op.Ath.* 18, 9-22.
- Åström, P., K.Demakopoulou & G.Walberg 1988: Excavations in Midea 1985, *Op. Ath.* 17, 7-11.
- Ault, B.A. 2005: *The Excavations at Ancient Halieis: Conducted by the University of Pennsylvania and Indiana University, Porto Kheli, Greece 2, The Houses: The Organization and Use of Domestic Space*, Bloomington & Indianapolis.
- Balcer, J.M. 1974: The Mycenaean Dam at Tiryns, *AJA* 78, 141-149.
- Βασιλοπούλου, Α., Σ.Κεραμιδης & Σ.Σπυροπούλου 2018: Επ-αναασκάπτοντας Έναν Πρόωμο Θολωτό Τάφο στην Καζάρμα Αργολίας, in Ε.Ζυμή et al. eds., *Το Αρχαιολογικό Έργο στην Πελοπόννησο (ΑΕΠΕΑ1): Πρακτικά του Διεθνούς Συνεδρίου, Τρίπολη, 7-11 Νοεμβρίου 2012*, Πανεπιστήμιο Πελοποννήσου, Καλαμάτα, 79-89.
- Bass, G.F. 2001: Review of "W.Phelps, Y.Lolos & Y.Vichos (eds.), *The Point Iria Wreck: Interconnections in the Mediterranean ca.1200 B.C.*, Hellenic Institute of Marine Archaeology, Athens, 1999", *AJA* 105, 341-343.
- Bintliff, J.L. 1977: *Natural Environment and Human Settlement in Prehistoric Greece: Based on Original Fieldwork*, BAR Supplementary Series 28, Oxford.

- Blegen, C.W. 1925: Excavations at the Argive Heraeum 1925, *AJA* 29, 413-428.
——— 1930-1931: Goniá, *Metropolitan Museum Studies* 3, 55-80.
——— 1937a: Post-Mycenaean Deposits in Chamber-Tombs, *AE* 1937, 377-390.
——— 1937b: *Prosymna: The Helladic Settlement Preceding the Argive Heraeum*, Cambridge.
——— 1939: Prosymna: Remains of Post-Mycenaean Date, *AJA* 43, 410-444.
Boyd, T.D. & M.H. Jameson 1981: Urban and Rural Land Division in Ancient Greece, *Hesperia* 50, 327-342.
Caskey, J.L. 1953a: An Early Settlement at the Spring of Lerna, *Archaeology* 6, 99-102.
——— 1953b: The Ancient Settlement at Lerna in the Argolid, in *Γέρας Αντωνίου Κεραμοπούλλου*, Εταιρεία Μακεδονικών Σπουδών, Athens, 24-28.
——— 1954a: Excavations at Lerna, 1952-1953, *Hesperia* 23, 3-30.
——— 1954b: Lerna 1953, *Archaeology* 7, 28-30.
——— 1955a: Excavations at Lerna, 1954, *Hesperia* 24, 25-49.
——— 1955b: The House of the Tiles at Lerna: An Early Bronze Age Palace, *Archaeology* 8, 116-120.
——— 1956: Excavations at Lerna, 1955, *Hesperia* 25, 147-173.
——— 1957: Excavations at Lerna, 1956, *Hesperia* 26, 142-162.
Cavanagh, W.G. & C.Mee 1998: *A Private Place: Death in Prehistoric Greece*, SIMA CXXV, Jonsered.
Coldstream, J.N. 2008: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, Updated Second edition, Exeter.
Cullen, T. ed. 2001: *Aegean Prehistory: A Review*, *AJA Supplement* 1, Boston.
Deger-Jalkotzy, S. & M.Zavadil eds. 2003: *LHIIC Chronology and Synchronisms: Proceedings of the International Workshop held at the Austrian Academy of Sciences at Vienna, May 7th and 8th, 2001*, Wien.
Demakoroulou, K. (Δημακοπούλου, Κ.) 1987: Πήλινη Ζωγραφιστή Λάρνακα από τη Βρασερκα Αργολίδας, in Λ.Καστρινάκη, Γ.Ορφανού & Ν.Γιανναδάκης eds., *ΕΙΛΑΠΙΙΝΗ: Τόμος Τιμητικός για τον Καθηγητή Νικόλαο Παύλινα*, Ηράκλειον, 69-78.
——— 1990: The Burial Ritual in the Tholos Tomb at Kokla, Argolis, in *Celebrations*, 113-123.
——— 1993: Argive Mycenaean Pottery: Evidence from the Necropolis at Kokla, in *Wace and Blegen*, 57-80.
——— 1999: A Mycenaean Terracotta Figure from Midea in the Argolid, in *Meletemata*, 197-205.
——— 2003: The Pottery from the Destruction Layers in Midea: Late Helladic IIIB2 Late or Transitional Late Helladic IIIB2 / Late Helladic IIIC Early?, in Deger-Jalkotzy & Zavadil eds., 2003, 77-92.
——— 2004: Knossos and the Argolid: New Evidence from Midea, in G.Cadogan, E.Hatzaki & A.Vasilakis eds., *Knossos: Palace, City, State— Proceedings of the*

Conference in Herakleion organised by the British School at Athens and the 23rd Ephoreia of Prehistoric and Classical Antiquities of Herakleion, in November 2000, for the Centenary of Sir Arthur Evans's Excavations at Knossos, British School at Athens Studies 12, 405-410.

Demakopoulou, K. & N.Divari-Valakou 1992-1993: A Linear B Inscribed Stirrup Jar from Midea (MI Z 2), *Minos* 27-28, 303-305.

——— 1994-1995: New Finds with Linear B Inscriptions from Midea (MI Z 2, Wv 3, Z 4), *Minos* 29-30, 323-328.

——— 1999: The Fortifications of the Mycenaean Acropolis of Midea, in *Polemos*, 205-215.

——— 2001: Evidence for Cult Practice at Midea: Figures, Figurines and Ritual Objects, in *Potnia*, 181-191.

Demakopoulou, K., N.Divari-Valakou, P.Åström & G.Walberg 1996: Excavations in Midea 1994, *Op. Ath.* 21, 13-32.

——— 1997-1998: Excavations in Midea 1995-1996, *Op. Ath.* 22-23, 57-90.

Demakopoulou, K., N.Divari-Valakou A.-L.Schallin, G.Ekroth, A.Lindblom, M.Nilsson & L.Sjögren 2002: Excavations in Midea 2000 and 2001, *Op.Ath.* 27, 27-58.

Demakopoulou, K., N.Divari-Valakou & G.Walberg 1994: Excavations and Restoration Work in Midea 1990-1992, *Op.Ath.* 20, 19-41.

Desborough, V.R.d'A. 1964: *The Last Mycenaeans and Their Successors: An Archaeological Survey c.1200-c.1000 B.C.*, Oxford.

DeVries, K. 1974: A Grave with a Figured Fibula at Lerna, *Hesperia* 43, 80-104.

Dietz S. & N.Divari-Valakou 1990: A Middle Helladic III/Late Helladic I Grave Group from Myloi in the Argolid (Oikopedon Manti), *Op.Ath.* 18, 45-62.

Dimou, E., B.Perdikatsis, G.Oikonomou & E.Konsolaki-Yannopoulou (Δήμου, Ε., Β.Περδικάτης, Γ.Οικονόμου & Ε.Κονσολάκη-Γιαννοπούλου) 2003: Ορυκτολογική Μελέτη Μεταλλικών και Άλλων Υλικών της Ύστερης Εποχής του Χαλκού από την Ανασκαφή του Αγ. Κωνσταντίνου Μεθάνων, in *Argosaronikos A*, 229-248.

Douzougli, A. (Ντούζουγλη, Α.) 1998: *Αρια Αργολίδος: Χειροποίητη Κεραμική της Νέστερης Νεολιθικής και της Χαλκολιθικής Περιόδου*, Athens.

Dragona-Latsoudi, A. (Δραγόνα-Λατσούδη, Α.) 1979: Μυκηναϊκός Κιθαρωδός από τη Ναυπλία, *AE* 1977, 86-98.

Felsch, R.C.S. 1971: Neolithische Keramik aus der Höhle von Kephalaria, *AM* 86, 1-12.

——— 1973: Die Höhle von Kephalaria: Eine Jungpaläolithische Siedlung in der Argolis, *AAA* 6, 13-27.

Foley, A. 1988: *The Argolid 800-600 B.C.: An Archaeological Survey-Together with an Index of Sites from the Neolithic to the Roman Period*, Göteborg.

——— 1998: Ethnicity and the Topography of Burial Practices in the Geometric Period, in *Argos et l'Argolide*, 137-144.

Fracchia, H.M. 1985: The Peloponnesian Pyramids Reconsidered, *AJA* 89, 683-689.

French, E.B., P.W.Stockhammer & U.Damm-Meinhardt 2009: Mycenae and Tiryns: The Pottery of the Second Half of the Thirteenth Century BC— Contexts and Definitions,

BSA 104, 175-232.

- Frickenhaus, A. & W.Müller 1911: Aus der Argolis: Bericht über eine Reise vom Herbst 1909, *AM* 36, 21-38.
- Frizell, B.S. 1984: The Tholos Tomb at Berbati, *Op.Ath.* 15, 25-44.
- Furtwängler, A. & G.Löschcke 1886: *Mykenische Vasen: Vorhellenische Thongefässe aus dem Gebiete des Mittelmeeres*, Berlin.
- Furumark, A. 1941a: *The Mycenaean Pottery: Analysis and Classification*, Stockholm (Reprint: *Mycenaean Pottery I: Analysis and Classification*, Stockholm, 1972).
- 1941b: *The Chronology of Mycenaean Pottery*, Stockholm (Reprint: *Mycenaean Pottery II: Chronology*, Stockholm, 1972).
- Gebauer, K. 1939: Forschungen in der Argolis, *AA* 1939, 268-294.
- Gejvall, N.-G. 1969: *Lerna: A Preclassical Site in the Argolid— Results of Excavations conducted by the American School of Classical Studies at Athens*, Volume I: *The Fauna*, Princeton.
- Gillis, C., C.Risberg & B.Sjöberg eds. 1997: *Trade and Production in Premonetary Greece: Production and the Craftsman: Proceedings of the 4th and 5th International Workshops, Athens, 1994 and 1995*, SIMA Pocket-book 143, Jonsered.
- Graef, B. 1909: *Die Antiken Vasen von der Akropolis zu Athen*, Berlin.
- Greenhalgh, P. 1980: The Dendra Charioteer, *Antiquity* 54, 201-205.
- Hägg, R. 1962: Research at Dendra 1961, *Op.Ath.* 4, 79-102.
- 1965: Geometrische Gräber von Asine, *Op. Ath.* 6, 117-138.
- 1974: *Die Gräber der Argolis: In Submykenischer, Protogeometrischer und Geometrischer Zeit—1. Lage und Form der Gräber*, Boreas 7:1, Uppsala.
- 1987: Submycenaean Cremation Burials in the Argolid?, in *Thanatos*, 207-212.
- 1992a: Geometric Sanctuaries in the Argolid, in *Polydipsion Argos*, 9-35.
- 1992b: A Scene of Funerary Cult from Argos, in R.Hägg ed., *The Iconography of Greek Cult in the Archaic and Classical Periods: Proceedings of the First International Seminar on Ancient Greek Cult, organised by the Swedish Institute at Athens and the European Cultural Centre of Delphi, Delphi, 16-18 November 1990*, Kernos Suppl.1, 169-176.
- Hall, J.M. 1995a: How Argive was the “Argive” Heraion? The Political and Cultic Geography of the Argive Plain, 900–400 B.C., *AJA* 99, 577-613.
- 1995b: Approaches to Ethnicity in the Early Iron Age of Greece, in N.Spencer ed., *Time, Tradition and Society in Greek Archaeology: Bridging the Great Divide*, London & New York, 6-17.
- Hamilakis, Y. 1996: A Footnote on the Archaeology of Power: Animal Bones from a Mycenaean Chamber Tomb at Galatas, NE Peloponnese, *BSA* 91, 153-166.
- 2003: Animal Sacrifice and Mycenaean Societies: Preliminary Thoughts on the Zooarchaeological Evidence from the Sanctuary at Ag.Konstantinos, Methana, in *Argosaronikos* A, 249-256.
- Hamilakis, Y. & E.Konsolaki 2004: Pigs for the Gods: Burnt Animal Sacrifices as Embodied

- Rituals at a Mycenaean Sanctuary, *OJA* 23, 135-151.
- Harland, J.P. 1925: The Calaurian Amphictyony, *AJA* 29, 160-171.
- Hjohlman, J., A.Penttinen & B.Wells 2005: *Pyrgouthi: A Rural Site in the Berbati Valley from the Early Iron Age to Late Antiquity: Excavations by the Swedish Institute at Athens 1995 and 1997*, Stockholm.
- Holmberg, E.J. 1983: *A Mycenaean Chamber Tomb near Berbati in Argolis*, Göteborg.
- Hope Simpson, R. & O.T.P.K.Dickinson 1979: *A Gazetteer of Aegean Civilisation in the Bronze Age I: The Mainland and Islands*, Göteborg.
- Iakovidis, S. 1983: *Late Helladic Citadels on Mainland Greece*, Brill.
- 2003: Late Helladic IIIC at Mycenae, in Deger-Jalkotzy & Zavadil eds. 2003, 117-123.
- Jacobsen, T.W. 1969: Excavations at Porto Cheli and Vicinity, Preliminary Report, II: The Franchthi Cave, 1967-1968, *Hesperia* 38, 343-381.
- Jameson, M.H. 1969: Excavations at Porto Cheli and Vicinity, Preliminary Report, I: Halieis, 1962-1968, *Hesperia* 38, 311-342.
- Jameson, M.H., C.N.Runnels & T.H.van Andel 1994: *A Greek Countryside: The Southern Argolid from Prehistory to the Present Day*, Stanford.
- Jantzen, U. 1938: Archäologische Funde vom Sommer 1937 bis Sommer 1938: Griechenland, *AA* 1938, 541-585.
- Jantzen, U., H.Döhl, P.Grossmann, W.R.Megow & J.Schäfer 1968-1969: Tiryns—Synoro—Iria 1965-1968, *AA* 1968, 369-374.
- Kalogeropoulos, K. (Καλογερόπουλος, Κ.) 2003: Ανακτορικός Πιθαμφορέας από την Κάντια της Αργολίδας, *AE* 2001, 189-203.
- Karo, G. 1911: Archäologische Funde im Jahre 1910: Griechenland, *AA* 1911, 119-152.
- Kelly, T. 1966: The Calaurian Amphictiony, *AJA* 70, 113-121.
- Konsolaki, E. 1995: The Mycenaean Sanctuary on Methana, *BICS* 40 (New Series 2), 242.
- Konsolaki-Yannopoulou, E. (Ε.Κονσολάκη-Γιαννοπούλου) 1999: A Group of New Mycenaean Horsemen from Methana, in *Meletemata*, 427-433.
- 2001a: New Evidence for the Practice of Libations in the Aegean Bronze Age, in *Potnia*, 213-220.
- 2001b: Μυκηναϊκός Εικονιστικός Κρατήρας από το Μόδι της Τροιζηνίας, in Αλεξανδρή & Λεβέντη eds. 2001, 43-50.
- 2002: A Mycenaean Sanctuary on Methana, in *PSC*, 25-36.
- 2003a: Η Μαγούλα στον Γαλατά της Τροιζηνίας: Ένα Νέο ΜΕ-ΥΕ Κέντρο στον Σαρωνικό, in *Argosaronikos A*, 159-228.
- 2003b: Ταφές Νηπίων στο Μυκηναϊκό Ιερό του Αγίου Κωνσταντίνου στα Μέθανα, in *Argosaronikos A*, 257-284.
- 2003c: Τα Μυκηναϊκά Ειδώλια από τον Άγιο Κωνσταντίνο Μεθάνων, in *Argosaronikos A*, 375-406.
- 2003d: Νέα Ευρήματα από την Αρχαία Τροιζήνα, in *Argosaronikos B*, 127-158.
- 2003e: Η Μυκηναϊκή Εγκατάσταση στο Νησάκι Μόδι της Τροιζηνίας, in Kyprissi-Apostolika & Papakonstantinou eds. 2003, 417-432.

- Kyparissi-Apostolika, N. & M.Papakonstantinou eds. 2003: *2nd International Interdisciplinary Colloquium: The Periphery of the Mycenaean World, 26-30 September, Lamia 1999*, Athens.
- Lambrinouidakis, V. (Λαμπρινουδάκης, Β.Κ.) 1979: Σχέσεις Επιδαύρου και Κορινθου υπό το Φώς των Ανασκαφών, *Πρακτικά του Α' Συνεδρίου Αργολικών Σπουδών, Ναύπλιον 4-6 Δεκεμβρίου 1976*, Πελοποννησιακά Παράρτημα 4, Athens, 28-36.
- 1981: Remains of the Mycenaean Period in the Sanctuary of Apollo Maleatas, in *SCABA*, 59-65.
- 1982 (1984) : Το Ιερό του Απόλλωνος Μαλεάτα στην Επιδαυρο και η Χρονολογία των Κορινθιακών Αγγείων, *ASAtene* 60 (Nuova Serie 44), II, 49-56.
- 2002: Conservation and Research: New Evidence on a long-living Cult: The Sanctuary of Apollo Maleatas and Asklepios at Epidauros, in M.Stamatopoulou & M.Yeroulanou eds., *Excavating Classical Culture: Recent Archaeological Discoveries in Greece*, Studies in Classical Archaeology I, Oxford, 213-224.
- Lolling, H.G. 1880: Ausgrabungen am Palamidi, *AM* 5, 143-163.
- Lord, L.E. 1938: The "Pyramids" of Argolis, *Hesperia* 7, 481-527.
- 1939: Watchtowers and Fortresses in Argolis, *AJA* 43, 78-84.
- 1941: Blockhouses in the Argolid, *Hesperia* 10, 93-112.
- Lupack, S.M. 2008: *The Role of the Religious Sector in the Economy of Late Bronze Age Mycenaean Greece*, BAR International Series 1858, Oxford.
- Mazarakis Aninian, A. 1997: *From Ruler's Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B.C.)*, Jonsæred.
- McAllister, M.H. 2005: *The Excavations at Ancient Halieis: Conducted by the University of Pennsylvania and Indiana University, Port Kheli, Greece 1, The Fortifications and Adjacent Structures*, Bloomington & Indianapolis.
- McAllister, M.H. & M.H.Jameson 1969: A Temple at Hermione, *Hesperia* 38, 169-185.
- Mee, C. & H.Forbes eds. 1997: *A Rough and Rocky Place: The Landscape and Settlement History of the Methana Peninsula, Greece— Results of the Methana Survey Project sponsored by the British School at Athens and the University of Liverpool*, Liverpool.
- Möbius, H. & W.Wrede 1928: Archäologische Funde in den Jahren 1926-1927, *AA* 1927, 345-410.
- Mommsen, H., T.Beier, D.Heirmermann & A.Hein 1994: Neutron Activation Analysis of Selected Sherds from Prophitis Ilias (Argolid, Greece): A Closed Late Helladic II Settlement Context, *JAS* 21, 163-171.
- Mountjoy, P.A. 1993: *Mycenaean Pottery: An Introduction*, Oxford.
- 1997: The Destruction of the Palace at Pylos Reconsidered, *BSA* 92, 109-135.
- 1999a: *Regional Mycenaean Decorated Pottery*, Rahden.
- 1999b: Late Minoan IIIC/Late Helladic IIIC: Chronology and Terminology, in *Meletemata*, 511-516.
- Papachristodoulou, J. (Παπαχριστοδούλου, Ι.) 1969: Ειδήσεις ἐξ Ἀργους, *AAA* 2, 159-162.
- 1970: Λύρκεια – Λύρκειον, *AAA* 3, 117-120.

- Papadimitriou, J. 1949: Le Sanctuaire d'Apollon Maléatas à Épidaure, *BCH* 73, 361-383.
- Parathanasopoulos, G.A. (Παπαθανασόπουλος, Γ.Α.) 1976: Το Πρωτοελλαδικό Ναυάγιο της Λοκού, *AAA* 9, 17-23.
- Pendlebury, J.D.S. 1930: *Aegyptiaca: A Catalogue of Egyptian Objects in the Aegean Area*, Cambridge.
- Peppas-Papaioannou, I. (Πέππας-Παπαϊωάννου, Ε.) 1985: *Πηλίνα Ειδώλια από το Ιερό του Απόλλωνα Μαλεάτα Επιδαυρίας*, Ph.D. thesis, University of Athens.
- Persson, A.W. 1931: *The Royal Tombs at Dendra near Midea*, Lund.
- 1942: *New Tombs at Dendra near Midea*, Lund.
- Petritaki, M. (Πετριτάκη, Μ.) 2003: Ύδρα. Το Οδοιπορικό Μιας Αρχαιολογικής Προσέγγισης, *Argosaronikos A*, 105-128.
- Phelps, W., Y.Lolos & Y.Vichos eds. 1999: *The Point Iria Wreck: Interconnections in the Mediterranean ca. 1200 BC— Proceedings of the International Conference, Island of Spetses, 19 September 1998*, Athens.
- Protonotariou, E. (Πρωτονοταρίου, Ε.) 1961: Μικρά Σκαφή Τάφων εν Μύλοις Αργολίδας, *AE* 1955, Αρχαιολογικά Χρονικά 1-8.
- Protonotariou-Deilaki, E. (Πρωτονοταρίου-Δειλάκη, Ε.) 1961: Χαλκούν Γεωμετρικών Ειδώλιον εξ Ασίνης, *AE* 1953-1954 III, 318-320.
- 1965: Ανασκαφή Λαξευτού Μυκηναϊκού Τάφου εν Ηραϊωί Άργους, *AE* 1960, Αρχαιολογικά Χρονικά 123-135.
- 1968: Θολωτός Τάφος Καζάρμας, *AAA* 1, 236-238.
- 1969: Θολωτός Τάφος Καζάρμας, *AAA* 2, 3-6.
- 1970: Μυκηναϊκόν Κράνος εκ Δενδρών, *AAA* 3, 106-108.
- 1982 (1984) : Από το Άργος του 8^{ου} και 7^{ου} αι. π.Χ., *ASAtene* 60 (Nuova Serie 44), II, 33-48.
- 1990a: Burial Customs and Funerary Rites in the Prehistoric Argolid, in *Celebrations*, 69-83.
- 1990b: The Tumuli of Mycenae and Dendra (poster) : With an Appendix by Sebastian Payne, in *Celebrations*, 85-106.
- Pullen, D.J. 2000: The Prehistoric Remains of the Acropolis at Halieis: A Final Report, *Hesperia* 69, 133-187.
- Renaudin, L. 1923: La Nécropole «Mycénienne» de Skhinokhori-Lyrkeia (?), *BCH* 47, 190-240.
- Runnels, C., D.J.Pullen & S.Langdon eds. 1995: *Artifact and Assemblage: The Finds from a Regional Survey of the Southern Argolid, Greece I, The Prehistoric and Early Iron Age Pottery and the Lithic Artifacts*, Stanford.
- Rutkowski, B. 1986: *The Cult Places of the Aegean*, Revised edition, New Haven & London.
- Rutter, J.B. 2001: Review of Aegean Prehistory II: The Prepalatial Bronze Age of the Southern and Central Greek Mainland, in Cullen ed. 2001, 95-155.
- Säflund, G. 1965: *Excavations at Berbati 1936-1937*, Uppsala.
- Schallin, A.-L. 1997: The Late Bronze Age Potter's Workshop at Mastos in the Berbati

- Valley, in Gillis, Risberg & Sjöberg eds. 1997, 73-88.
- 2002: Pots for Sale: The Late Helladic IIIA and IIIB Ceramic Production at Berbati, in Wells ed. 2002, 141-155.
- Schilbach, J. 1977: Kastell am Nordrand der Ebene von Iria (Argolis), *AE* 1976, 126-132.
- Schumacher, R.W.M. 1993: Three Related Sanctuaries of Poseidon: Geraistos, Kalauria and Tainaron, in N.Marinatos & R.Hägg eds., *Greek Sanctuaries: New Approaches*, London & New York, 62-87.
- Scranton, R.L. 1938: The Pottery from the Pyramids, *Hesperia* 7, 528-538.
- Shelmerdine, C.W. 2001: Review of Aegean Prehistory VI: The Palatial Bronze Age of the Southern and Central Greek Mainland, in Cullen ed. 2001, 329-381.
- Shelton, K.S. 1996: *The Late Helladic Pottery from Prosymna*, Jonsered.
- 2001: Four Chamber Tomb Cemeteries at Mycenae, *AE* 2000, 27-64.
- Sjöberg, B.L. 2004: *Asine and the Argolid in the Late Helladic III Period: A Socio-economic Study*, BAR International Series 1225, Oxford.
- Snodgrass, A.M. 1971: *The Dark Age of Greece: An Archaeological Survey of the Eleventh to the Eighth Centuries BC*, Edinburgh.
- Σταματάκης, Π. 1878: Περί του παρά το Ηραϊον Καθαρισθέντος Τάφου, *AM* 3, 271-286.
- Ström, I. 1988: The Early Sanctuary of the Argive Heraion and its External Relations (8th-Early 6th Cent. B.C.): The Monumental Architecture, *Acta Archaeologica* 59 (published in 1989), 173-203.
- 1995: The Early Sanctuary of the Argive Heraion and its External Relations (8th-Early 6th. Cent. B.C.), *Proceedings of the Danish Institute at Athens* I, Athens, 37-128.
- Styrenius, C.-G. 1967: *Submycenaean Studies*, Lund.
- Takahashi, Y. 2009: *Τα Έθιμα Ταφής στην Αργολίδα: Από την Μετανακτορική έως και την Πρωτογεωμετρική Περίοδο*, Ph.D thesis, University of Athens.
- Theodorou-Mavrommatidi, A. (Θεοδώρα-Μαυρομματιδί, Α.) 2003: Ανασκαφική Έρευνα στο Ιερό του Απόλλωνος Μαλεάτα: Η Πρωτοελλαδική Περίοδος, in Vlachopoulos & Birtacha eds. 2003, 247-262.
- Thomatos, M. 2006: *The Final Revival of the Aegean Bronze Age: A Case Study of the Argolid, Corinthia, Attica, Euboea, the Cyclades and the Dodecanese during the LHIII Middle*, BAR International Series 1498, Oxford.
- Tsountas, C (Τσουντας, Χ.) 1889: Ανασκαφαι Τάφων εν Μυκήναις, *EA* 1888, 119-180.
- Verdelis, N.M. (Βερδελής, Ν.Μ.) 1959: Σύντομος Έκθεσις περί των Διεξαχθεισών κατά το 1957 Ανασκαφών υπό της Εφορείας Αρχαιοτήτων Δ' Περιφέρειας (Αργολιδοκορινθίας), *AE* 1956, Αρχαιολογικά Χρονικά 1-13.
- 1967: Neue Funde von Dendra, *AM* 82, 1-53.
- Vichos, Y. (Βήχος, Γ.) 2003: Οι Ενάλιες Αρχαιολογικές Έρευνες του Ι.Ε.Ν.Α.Ε. στον Αργοσαρωνικό: Το Πρωτοελλαδικό Φορτίο από τον Δοκό, *Argosaronikos* A, 139-148.
- Vlachopoulos, A. & K.Birtacha (Βλαχόπουλος, & Α. Κ.Μπιρταχα) eds. 2003: *Αργοναυτής: Τιμητικός Τόμος για τον Καθηγητή Χρήστο Γ. Ντούμα*, Athens.

- Wace, A.J.B. 1936: A New Mycenaean Beehive Tomb, *The Illustrated London News*, February 15, 1936, 276-279.
- Walberg, G. 1967: Finds from Excavations in the Acropolis of Midea 1939, *Op.Ath.* 7, 161-175.
- 1992a: Excavations on the Lower Terraces at Midea, *Op.Ath.* 19, 23-39.
- 1992b: A Linear B Inscription from Midea, *Kadmos* 31, 93.
- 1996-1997: Two New Nodules from the Lower Terraces at Midea, *Minos* 31-32, 133-134.
- 1999a: The End of the Late Bronze Age at Midea, in *Polemos*, 157-160.
- 1999b: The Megaron Complex on the Lower Terraces at Midea, in *Meletemata*, 887-892.
- Walberg, G., et al. 1998: *Excavations on the Acropolis of Midea: Results of the Greek-Swedish Excavations under the Direction of Katie Demakopoulou and Paul Åström*, vol.I: *The Excavations on the Lower Terraces 1985-1991*, Stockholm.
- Walberg, G., et al. 2007: *Midea: The Megaron Complex and Shrine Area: Excavations on the Lower Terraces 1994-1997*, Prehistory Monographs 20, Philadelphia.
- Walter, O. 1940: Archäologische Funde in Griechenland von Frühjahr 1939 bis Frühjahr 1940, *AA* 1940, 121-308.
- Wedde, M. 2003: The Boat Model from the Late Helladic IIIA-B Sanctuary at Agios Konstantinos (Methana) and its Typological Context, in *Argosaronikos A*, 285-300.
- Wells, B. 1990a: The Asine Sima, in N.A.Winter ed., *Proceedings of the First International Conference on Archaic Greek Architectural Terracottas, December 2-4, 1988, Hesperia* 59, 157-161.
- 1990b: Death at Dendra: On Mortuary Practices in a Mycenaean Community, in *Celebrations*, 125-140.
- 2003: The Sanctuary of Poseidon at Kalaureia: The New Investigation of 1997, in *Argosaronikos A*, 337-347.
- Wells, B. ed. 1996: *The Berbati-Limnes Archaeological Survey 1988-1990*, Stockholm.
- 2002: *New Research on Old Material from Asine and Berbati: In Celebration of the Fiftieth Anniversary of the Swedish Institute at Athens*, Stockholm.
- Wells, B., A.Penttinen, J.Hjohlman & E.Savini 2005: The Kalaureia Excavation Project: The 2003 Season, *Op.Ath.* 30, 127-215.
- Welter, G. 1941: *Troizen und Kalaureia*, Berlin.
- Whitbread, I.K., M.J.Ponting & B.Wells 2007: Temporal Patterns in Ceramic Production in the Berbati Valley, Greece, *JFA* 32, 177-193.
- Wide, S. 1899: Geometrische Vasen aus Griechenland, *JdI* 14, 26-43, 78-86, 188-215.
- 1910: Gräberfunde aus Salamis, *AM* 35, 17-36.
- Wide, S. & L.Kjellberg 1895: Ausgrabungen auf Kalaureia, *AM* 20, 267-326.
- Wiencke, M.H. 1998: Mycenaean Lerna, *Hesperia* 67, 125-214.
- Wright, J.C. 1982: The Old Temple Terrace at the Argive Heraeum and the Early Cult of Hera in the Argolid, *JHS* 102, 186-201.

—— 1994: The Spatial Configuration of Belief: The Archaeology of Mycenaean Religion, in Alcock & Osborne eds. 1994, 37-78.

追記

パレア・エピダウロス (Palaia (or Palaea) Epidaurus もしくは Ancient Epidaurus village) の火葬墓を発掘したC. ビテロス氏からの私的通信によると、火葬墓が発見された地点は、パレア・エピダウロスでも横穴墓とは異なる場所であるという。となると、後期青銅器時代IIIC期には、ミケーネ時代以来の横穴墓を使用した人々と、それとは別の場所に火葬墓を作った人々の二つのタイプの居住者が存在したことになる。両者の関係などが問題となろう。

脱稿後入手した文献についても、若干の事柄を記しておきたい。まずコクラに関しては、トロス墓出土の副葬品を扱った次の論文がある。K.Demakopoulou & S.Aulsebrook, The Gold and Silver Vessels and Other Precious Finds from the Tholos Tomb at Kokla in the Argolid, *BSA* 113, 2018, 119-142.

またカンディアに関しては、下記の文献を付け加えておきたい。L. Rahmstorf, A 'Wall-Bracket' from Kandia in the Argolid: Notes on the Local Character and Function of an 'East Mediterranean' Artefact of the Late Bronze Age/ Early Iron Age, in Y. Galanakis et al. eds., *AΘYPMATA: Critical Essays on the Archaeology of the Eastern Mediterranean in Honour of E.Susan Sherratt*, Oxford, 2014, 187-195.

表 1

アルゴリスにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期における人的活動の痕跡
 (遺跡ごとに資料が確認された時期に○を付けた)

| 遺 跡 | 後期青銅器時代 IIIC期 | 亜ミケーネ期 | 原幾何学文様期 |
|-------------------------|------------------|--------|---------|
| フィフティア (ボリアリ) | ○ | | |
| ゴルツリア | ○ | | |
| ハニア (モナスティラキ) | ○ | | |
| ベルバティ及びその周辺 | ○ | | |
| ヴラセルカ | | | |
| プロシムナ / ヘライオン | ○ | | |
| スヒノホリ | | | |
| ミデア | ○ | | ○ |
| デンドラ | | | |
| クルタキ | | | |
| コクラ | | | |
| ケファラリ | | | |
| アギオス・アドリアノス (カツィングリ) | | | |
| ナウプリア | | ○ | ○ |
| アリア周辺 | ○ | | |
| レルナ | | | ○ |
| キヴェリ | | | |
| カザルマ | | | |
| リグリオ | | | |
| エピダウロス | | | |
| ネア・エピダウロス周辺地域 | | | |
| パレア・エピダウロス | ○ | | ○ |
| シノロ | | | |

| | | | |
|-------------------------|---|--|---|
| カンディア | ○ | | |
| イリア | ○ | | |
| メタナ半島 | ? | | ○ |
| トロイゼン | | | |
| ガラタス | ○ | | |
| ピガディア | | | ○ |
| エイレオイ (イリオカストロ) | | | |
| コテナ | ○ | | |
| ヘルミオネ | 1 | | ○ |
| フルニ | ○ | | |
| フランクティ | | | |
| クラニディ近郊 プロフィティス・イリアス | ○ | | |
| ハリエイ (ポルト・ヒェリ) | | | ○ |

1 ヘルミオネから西方に1 km離れた丘からは、後期青銅器時代IIIC期の土器が確認されている。

表2

アルゴリスにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期の埋葬資料
 (遺跡ごとに資料が確認された時期に○を付けた)

| 遺 跡 | 後期青銅器時代 IIIC期 | 亜ミケーネ期 | 原幾何学文様期 |
|-------------------------|------------------|--------|---------|
| フィフティア (ボリアリ) | ○ | | |
| ゴルツリア | ○ | | |
| ハニア (モナスティラキ) | ○ | | |
| ベルバティ及びその周辺 | | | |
| ヴラセルカ | | | |
| プロシムナ/ヘライオン | ○ | | |
| スヒノホリ | | | |
| ミデア | | | |
| デンドラ | | | |
| クルタキ | | | |
| コクラ | | | |
| ケファラリ | | | |
| アギオス・アドリアノス (カツィングリ) | | | |
| ナウプリア | | ○ | ? |
| アリア周辺 | | | |
| レルナ | | | |
| キヴェリ | | | |
| カザルマ | | | |
| リグリオ | | | |
| エピダウロス | | | |
| ネア・エピダウロス周辺地域 | | | |
| パレア・エピダウロス | ○ | | ○ |
| シノロ | | | |

ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料

| | | | |
|-------------------------|--|--|---|
| カンディア | | | |
| イリア | | | |
| メタナ半島 | | | |
| トロイゼン | | | |
| ガラタス | | | |
| ピガディア | | | |
| エイレオイ (イリオカストロ) | | | |
| コテナ | | | |
| ヘルミオネ | | | ○ |
| フルニ | | | |
| フランクティ | | | |
| クラニディ近郊 プロフィティス・イリアス | | | |
| ハリエイ (ポルト・ヒェリ) | | | |

